

Fate/Object

あんぽいな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数々の超大型兵器オブジェクトを破壊してきたクウエンサーIIバーボタージュとヘイヴィアIIウインチエル。次なる敵は過去の英霊、その数七人、二人が持つのは銃と爆薬、それと少しの運と機転

「ただいま、くそつたれの戦場さん」

この作品はF a t e / A p o c r p h aとヘヴィーオブジェクトのクロスオーバーです。赤のアサシンにクウエンサーとヘイヴィア、赤のキャスターがセミラミスとなっています。シエイクスピア好きの皆様すみません。

目次

七人の小人と杭の森	ルーマニア山中偵察戦 I	1
七人の小人と杭の森	ルーマニア山中偵察戦 II	3
七人の小人と杭の森	ルーマニア山中偵察戦 III	6
七人の小人と杭の森	ルーマニア山中偵察戦 IV	10
七人の小人と杭の森	ルーマニア山中偵察戦 V	15
七人の小人と杭の森	ルーマニア山中偵察戦 VI	21
かくれんぼには十秒数えろ	シギシヨアラ夜間市街地戦 I	28
かくれんぼには十秒数えろ	シギシヨアラ夜間市街地戦 II	31
かくれんぼには十秒数えろ	シギシヨアラ夜間市街地戦 III	36
かくれんぼには十秒数えろ	シギシヨアラ夜間市街地戦 IV	40
かくれんぼには十秒数えろ	シギシヨアラ夜間市街地戦 V	44
かくれんぼには十秒数えろ	シギシヨアラ夜間市街地戦 VI	49
かくれんぼには十秒数えろ	シギシヨアラ夜間市街地戦 VII	54
ステータス	クウエンサー&ヘイヴィア	61
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 I	64
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 II	67
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 III	71
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 IV	75
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 V	79
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 VI	82
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 VII	87
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 VIII	90
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 IX	95
踊る阿呆と撃つ阿呆	ミレニア城塞強襲戦 X	100

誰が蝙蝠を殺したか
誰が蝙蝠を殺したか
空中庭園迎撃戦
空中庭園迎撃戦

I
II

109
114

七人の小人と杭の森 ルーマニア山中偵察戦Ⅰ

結局、戦争はなくならなかった。

でも、変化はあった。くだらない殺し合いが淡々と続く中にも、変化はあった。

超大型兵器オブジェクト。

それが、戦争の全てを変えた。

ーヘヴィーオブジェクト 一巻よりー

「なあヘイヴィア、俺たち何で死んだ後まで給料も貰わずに戦争やってるんだろうね。」

鬱蒼と茂った森の中、二人の少年が声を潜めて話している。二人とも、緑色の割合の高い迷彩服を着用し、一方は小銃のスコープを覗き込み、もう一方は双眼鏡を目に当てながら遠くに見える城を眺めている。

「そう言うなよクウエンサー、ここにはおっぱいのかい女王様もケモミミスレンダー美少女もいる、それで充分じゃねえか。」

「本当にそう思ってる?」

「んなわけねえだろ、第一手を出したら殺されるようなのばかりじゃねえか。それ以外はむさ苦しい男かイケメンしかいねえよ。何が楽しくて敵の本拠地の偵察なんてしなくちゃいけないんだよ!」

「同じ偵察なら女風呂の偵察に行きたいよね。こう、湯けむりの向こう側にうつすらと見える身体のラインとか、火照ってほのかに赤くなった肌とか。」

「やめろクウエンサー!そこまで聞くと見たくなってくるだろうが!」

「そういえば俺たち一回フローレイティアさんのシャワーシーン覗いたよね。」

「そういえばそんなこともあったな。トライコア沈めた後だったか。」

「また覗きたいな……。」

「ちよつと待て、そういえば俺たち霊体化できるぞ！」

「それだ！」

「やったなヘイヴィア、今の俺たちはバレずに覗きが出来る。これは行くしかない！」

「ハッハッハ、ハッハッハッハ!!」

ゴウン!

「おいクウエンサー、なんか聞こえないか。」

「確かに、何か動いているような……。」

ゴウン!!

「やっぱ何かが近づいてきている……。」

ゴウン!!!

「おいやべえぞクウエンサー! 敵のゴーレムが何体もコツチに向かつて来てやがる、多分さっきの笑い声で気付かれた! 逃げるぞ！」

「畜生、生きてた時からこんなばっかりだ！」

「お前さっきハンドアックス仕掛けてたよな! それであいつら倒せるか?」

「OK! 任せろ相棒！」

走り出す二人の少年、彼らの名はクウエンサーIIバーボタージュとヘイヴィアIIウインチエル、彼らはある世界において、数多の超大型兵器オブジェクトを生身で撃破し、伝説となった兵士と学生である。彼らはこの外典の地で何を成し、戦ってゆくのか、彼等が持つのは銃と爆薬、それと少しの運と機転

「ただいま、くそつたれの戦場さん」

七人の小人と杭の森 ルーマニア山中偵察戦Ⅱ

『聖杯戦争』

万物の願いを叶える「聖杯」を巡り、七人の魔術師^{マスター}が自らと契約した七騎の使い魔^{サーヴァント}をもつて覇権を競う魔術儀式である。他の六組が排除された結果、最後に残った一組にのみ、聖杯を手にし、願いが叶う権利が与えられる。

だが、冬木で行われていた第三次聖杯戦争。その大聖杯が第二次世界大戦の混乱に乗じて何者に強奪された。

数十年後、魔術師の名門ユグドミレニア一族の長であるダーニツク・ブレストーン・ユグドミレニアは、「大聖杯」の所有及び、魔術協会からの離反と独立を宣言した。

そしてダーニツク達ユグドミレニア一族は、「黒」の陣営としてサーヴァントを召喚。ルーマニア、トリファスに拠点を置いた。

これを危険視し、何としてでも大聖杯を奪還したい魔術協会は、ユグドミレニアの討伐を決意。「黒」の陣営に対する「赤」の陣営として、魔術師たちを送り込み、サーヴァントを召喚させた…

「と、聖杯大戦の状況はこのような感じですね。」

ルーマニア、シギシヨアラの山上教会、そこに三人の人影があった。カソックを着た白髪の青年、金髪で線の細い青年、茶髪に金髪の青年と同じ迷彩の軍服を着た青年の三人だ。

「状況は分かったけどなあ、いい加減自己紹介ぐらいしようぜ。」

そうボヤク茶髪の青年、彼らは、かなり長い間話していたようだ。

「そういうえばまだでしたね。 私はシロウ・コトミネと申します。今

回、聖杯大戦の監督役兼マスターを務めさせていただきます。」

「じゃあこつちも自己紹介しようかな。」

金髪の青年が言う。

「赤のアサシンとして召喚された、正統王国第三十七機動整備大隊所属、クウエンサー||バーボタージュ。」

「同じく正統王国第三十七機動整備大隊所属、ハイヴィア||ウイン

チエルだ。」

「よろしくお願ひします、これからの働きに期待しています。それにしても、クウエンサーとハイヴィアですか…」

「どうかした?」

「いえ、聞いたことの無い名前でしたので、お二人は何処の英霊なのでしょう?」

確かに、その疑問ももつともだ。クウエンサーやハイヴィアといった人物の名前は聞いたことがない。さらに、正統王国と言った国家は存在しない。

「ああ、多分俺達はまだこの時代には生まれていない。」

「と言いますと?」

「つまり、俺らは未来から来たってことだろ。」

「なるほど、未来ですか… 聖杯戦争で召喚が可能な事は知っていましたが、見たのは初めてですね。」

「そういえば、俺達を召喚したマスターは何処に行ったんだ?」

「それでしたら、奥の部屋で休んでおられますよ。会うのは後日にした方が良いかと。」

「そっか、ならそうさせてもらうよ。」

「では、そろそろ他の方達との顔合わせに行きましようか。」

そう言つて、奥の部屋へと歩き出すコトミネ。

「俺ら以外には、何が召喚されているんだ?」

「すでにアーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、バーサーカーが召喚されています。」

「後はセイバーだけか。」

「ええ、セイバーとそのマスターはまだ此方に到着していません、此方に合流次第、聖杯大戦の開始となります。」

「つまりそれまでは…」

「自由にしていただいて構いません、何かあれば、こちらから招集します。」

「よしクウエンサー! ナンパしに行くぞ!」

「やだよ、生前一度も成功しなかつたじゃんか」

「二応、神秘の秘匿をしなければならぬので、やめておいて頂けると…」

苦笑いするコトミネ、そこからはばらく歩き、一つの扉の前で立ち止まる。

「では、皆さんここでお待ちですので。」

そして、扉を開いた。

「皆さん、アサシンを連れて来ましたよ。」

「遅かったではないか、我がマスターよ。」

奥に座る黒いドレスを纏った女性がそう答える。

「すみません、説明に時間がかかってしまったもので。」

「そうか、ならば仕方ない。」

緑色の衣装を纏った少女が言う。

「あれ？何で二人いるんだ？」

銀の軽鎧を着た美丈夫が問いかける。

「……」

壁際に立っている男は何も言わない。

「ははははは！アサシンよ、共に叛逆を成そうではないか！」

マッスル
筋肉が叫ぶ。

クウエンサーとヘイヴィア
アサシンは思う。

「キャラが、濃いッ…！」

七人の小人と杭の森 ルーマニア山中偵察戦Ⅲ

「(ヤバイぞハイヴィア、思ってた以上にキャラが濃いんだけど!)」
「(落ち着けクウエンサー、生前にもキャラが濃いやつなんていっぱいいただろ。ほら、お姫様とかおほほとかスラッター・ハニーサククルとか。)」

「(いやそうだけでも!というか最後のはキャラが濃いというか頭がおかしいのほうが合ってるんじゃないや……。)」

コソコソと話すクウエンサーとハイヴィア、

「どうした、入らないのか?」

いつまでも部屋に入らないクウエンサーとハイヴィアを疑問に思ったのか、銀の軽鎧を着た美丈夫が言う。

「いやいや、入るぜ。」

「失礼しまーす。」

そう言っつて部屋に入る。部屋には大きな長机と椅子が置いてあり、そこに四人が座っていた。

「そこ、空いてるぞ。」

銀の軽鎧を着た美丈夫が席の一つを指差す。

クウエンサーとハイヴィアが座り、コトミネが黒いドレスを纏った女性の隣に座る。

「さて。」

黒いドレスを纏った女性が口を開く

「我はアツシリアの女帝、セミラミスである。此度はキャスターとして現界した。貴様ら、名は何という?」

「クウエンサー||バーボタージュです。」

「ハイヴィア||ウインチエルだ。」

「そうか、知らぬ名だ。まあよい、結果を出せば文句は言わん、精々努力する事だな。」

「(……この人多分かなりのドSだな。)」

「(ああ、しかも部下に無理難題を押し付けて楽しむタイプだ。)」

「(フロレーティアさんみたいなの?)」

「(それよりもヒドいだらう多分。)」

「そういえば、二人ともアサシンなのか?」

先ほどから疑問に思っていたのか、美丈夫が質問した。

「ああ、俺達二人は生前にずっとコンビ組まされてたからな、二人で一セットって認識されていたんだらう。でも何で死んでからもこいつとセットなんだ……。」「

「それはコツチのセリフだけクウエンサー、テメエのせい何度危ない橋を渡ったと思ってる!」

「あの時はしょうがなかっただろ。そうでもしなきゃ皆死んでた。」

「テメエはいつも爆弾仕掛けるだけだっただろうが!イグアスの時もジブラルタルの時もコツチはいつも銃撃戦だったんだが!」

「イグアスの時はお前」コツチは俺が担当する、そつちはテメエに任せた!」って言ってるだろ!」

「随分と仲がいいんだな。」

「誰がこんな奴と!」

「息ピツタリじゃねえか……。」「

呆れる美丈夫。

「そういえば、アンタは……。」「

「ああ、済まねえ、自己紹介がまだだったか。俺はアキレウス。ライダーとして召喚された。それでコツチの姐さんが、」

別の席に座っていた緑色の衣装を纏った少女を指す。

「アーチャー、アタランテだ。」

そう自己紹介するアタランテ。だがクウエンサーとハイヴィアは別の場所に注目していた。

「(クウエンサー、あれはまさか……。)」

「(ああ、間違いない。あれは本物のKEMOMIMIだ!)」

「(マジかよ。過去にあの”島国”で爆発的なブームを引き起こしたという……。)」

「(まさか本物が見られるなんて……。ツ。)」

「(死んでまで来た甲斐があつたな。)」

感動するバカ二人

「どうした、私の顔に何か付いているか？」

「いいえなんでもありません!!」

「そうか、ならば良いのだが。」

全力で誤魔化すバカ二人、流星にあなたの耳を見て感動してしましたとは言いにくいだろう。

「(バレなくて良かったな。)」

「(ああ、だがここにお姫様がいなくて良かったな。いたらどんな目で見られるか……。)」

ゾツツ!!

「(どうしたクウエンサー?)」

「(いや、今謎の悪寒が……。)」

「　　そういえば、アンタは誰なんだ？」

ハイヴィアが振り向き、壁際に立っている男に聞く。

「ランサー、カルナだ。」

「そうか、よろしく。」

そう返し、前に向き直る。

目の前に壁が、いや筋肉が聳えていた。

「……………、えっ。」

「アサシンよ、さっそくで悪いが、君は圧制者かな？」

思わずコトミネの方を向き、助けを求めるクウエンサーとハイヴィア。

「彼はスパルタクス、バーサーカーですよ。」

「こやかに答えるコトミネ。違う、そういう事が聞きたいんじゃない。

「どうなのだ、早く答えないか。」

答えを急かすバーサーカー、

「因みに、圧制者だった場合は……?」

「決まっているだろう、叛逆だ。」

「なあハイヴィア!俺達超虐げられてたよな!!」

「ああクウエンサー!俺らあの上官にケツ蹴られたりしてたしな!!」

そしてバーサーカーの顔色を伺う。

「そうか、ならば共に叛逆だ！我々は虐げられし奴隷である!!ならば
ば圧制者への叛逆を成さねばなるまい!!!」

バーサーカー的にセーフだったようだ。

「すみません、フローレイティアさん、勝手に圧制者にしてしまいました…。」

「皆さん、セイバーとそのマスターから明日到着するとの連絡がありました。よって、到着次第、聖杯大戦の開始とします。」

コトミネが注目を集めて言う。

「キヤスターは私と一緒にセイバーと会って下さい。」

「了解した、我がマスターよ。」

「他の方々は追って指示を伝えます。それまでは自由にしていただいて構いません。」

「腕がなるな、どんな豪傑がいるのか楽しみだぜ。」

ライダーが楽しそうに言う。

「汝らなら大丈夫だろうが、あまり無茶はするなよ。」

アーチャーが言う。

「承知した。」

ランサーが返答する。

「ははははは！待っておれ圧制者たちよ！我が愛で滅ぼしてやろう!!」

バーサーカーが高笑する。

聖杯大戦が、始まる……。

七人の小人と杭の森 ルーマニア山中偵察戦Ⅳ

聖杯大戦が、始まる……。

とは言ったものの、実際セイバーが到着するまではヒマである。と、いうことで……。

「そういえばルーマニアって俺達の時代だどどの勢力だっけ、信心組織？」

「知らねえよ。そういう世界地図を見て作戦を立てるのは上の仕事だったからな。俺らは戦場の地図さえ覚えておけばよかったし。」

「そう言いながら車を走らせるヘイヴィア、彼らは街に買い物に出ている。」

「それにしても、こんな大量に買う必要があつたのか？」

振り向いて荷台を見るヘイヴィア、そこには大量の荷物が積まれていた。

「ハンドアックスは魔力さえあればどれだけでも使えるけど、他にもトラップを作る為の材料も必要だしね。軍と違って支給してくれる訳でも無いし。」

「そうか、そういうや teme の兵科は工兵だったな。」

「そうやって考えると軍って結構恵まれてたんだね。自作しなくても済むから。」

「そう言つて窓の外を眺めるクウエンサー、彼らのいるシギシヨアラは古い建物が数多く残されている地区であり、窓からは古き良き中世の景色が今も楽しめる。」

「長閑だねえ、この景色見ると戦争なんてやりたく無くなつてくるよ。」

「視界をシギシヨアラの景色が流れていく、趣ある建物や灰色の筋肉、鮮やかな植物の緑……」

「んっ。」

「どうしたクウエンサー、ビキニのねーちゃんでもいたか？」

「いや、露出度的にはそれ以上だと思う。」

「マジでか！ teme だけズルい俺も見たい！」

そう言つてUターンするハイヴィア、

「お前、さつき見た目が未成年だったせいでエロ本売ってもらえなかった事気にしてる?」

「当たり前だ! 何でこの時代の見た目なんだよ!」

「サーヴァントは全盛期の肉体で召喚されるってコトミネも言つたし、仕方無いんじゃないか?」

「そう言うテメエは悔しく無いのか、エロ本が買えなかったんだぞ!」

「ふっふっふ、俺にはコレがある!」

「携帯端末、しかも軍で支給されていた奴か? そんなもんがどうした……。まさかッ!」

「ああ、俺はコレにあんな映像やこんな画像を保存して持っていた!」

「畜生、俺も嫁が定期的にチェックしなければ……。」

「まあ、俺も何回かはバレて殺されかけたんだけどね。」

生前の思い出に浸るクウエンサーとハイヴィア、

「おい、お前の言つてたのつてあれじゃ無いよな……。」

「残念ながらあれだよ。」

「ビキニのねーちゃんじゃ無いじゃねえか!!」

「誰もそんな事言っていないし、露出度は高いだろ。」

「バーサーカーじゃねえか!! 見なかった事にして帰ろうぜ。」

だが、その前にバーサーカーが気付いてしまった。

「おお! アサシン達よ!」

「(仕方ない…) 何でこんな所にいるんだ?」

「此れより压制者達へと叛逆しに行くのだ!! こうしている今も压制者達は弱者を虐げ、君臨している。弱者の盾となり、虐げられし者達を解放することこそ、我が全てである。故に、我は压制者へと叛逆するのだ。」

「(どうしようハイヴィア、全く分からない。)」

「(安心しろ、俺もだ。)」

「压制者達よ! 待っておれ!! 直ぐに汝らを抱擁してやろう!!」

そう言って再び走り出すバーサーカー、
「えっと、つまりは敵の本拠地に殴り込みに行ってくるって事でないのかな？」

「知るかよ、何も見なかった事にして帰るぞ。」
しかし、そんな二人に声がかけられる。

「どうしたアサシン、こんな所で。」
声をかけたのはライダーとアーチャーだった。

「買い物に行った帰りだけど。ライダーと姐さんは何でこんな所に？」

「汝らまでその呼び名で呼ぶのか……。」

「俺達はバーサーカーを追い掛けて来た。野郎、突然圧制者がどうか叫んで走り出したからな。」

そう言って再び追い始めるライダーとアーチャー、だか、ライダーが振り向いて言う

「そう言えば、ヤツに伝えていなかったな。丁度いい、今から帰るならコトミネに伝えておいてくれ。」

「分かった、伝えておくよ。」

そして、車を走らせる事数十分、協会から少し離れた駐車場に車を停める。

「さて、コトミネに報告しに行きますか。」

「荷物を運び込むのは後でいいよな。」

「ああ、そういえばセイバーは到着したのか？」

そう言いながら協会へ続く屋根の付いた階段を登る、途中で、髭を生やしたダンディーなおっさんとすれ違う。

「今のおっさん、かっこ良かったな。」

「ああ、あんなおっさんになりたかった。」

そう話すクウエンサーとハイヴィア。

「おい、テメエら。」

突然後ろから話しかけられる。

「どうしました？」

そう言って振り向くクウエンサーとハイヴィア、するとそこには、

鎧兜に身を包んだ騎士が立っていた。

「テメエら、サーヴァントだろ。」

急な事に、戦闘体制を取るクウエンサーとハイヴィア、ハンドアックスに信管を差し込み、直ぐに起爆できるようにする。またハイヴィアも、銃の安全装置を外し、騎士に向けて構えていた。

「ほれ見ろマスター、やっぱりサーヴァントじゃねえか。」

「さっきまでの見た目で分かる訳が無いだろ。」

そう会話する騎士とおっさん。

「テメエらは……。」

「ああ、紹介が遅れたな、俺はセイバーのマスターの獅子劫界離だ。それでコツチが」

「セイバーだ。」

そこまで聞き、武器を下ろす二人。

「それで、そっちは？」

「アサシンだ、二人ともな。」

「どっちもアサシンなのか……。」

「それにしても、さっきまでの格好は英霊としてどうなんだ？」

そう言う獅子劫、確かに先程までのクウエンサーとハイヴィアの格好は、上がTシャツに下がカーゴパンツと、何処にでも居そうな格好だった。

「良いんだよ、休みの時まで軍服なんぞ着たくない。」

そう答えるハイヴィア。

「そういうモンなのか……。」

「じゃ、俺達はここらで。」

「ああ、また戦場で。」

そう言っつて別れる二人、暫らくしてクウエンサーとハイヴィアが離れた後、獅子劫が聞く。

「セイバー、あのキャスターには警戒していたが、あいつらは良かったのか？」

「ああ、キャスターは母上みたいな感じがしたから警戒していたが、あいつは大丈夫だろう。」

「何でだ？」

「あいつら、馬鹿っぽかったし。」

「ハックシヨイ!!」

「風邪か？」

「いや、サーヴァントは風邪なんて引かないだろ。」

「じゃあ誰かがこのイケメン貴族ヘイヴィア様の事を噂しているんだな！」

「この時代に知っている人なんていないだろ……。」

七人の小人と杭の森 ルーマニア山中偵察戦Ⅴ

「ただいまー。」

教会の扉を開け中に入る二人

「おや、お帰りなさい。先程までセイバーとそのマスターが来ていましたよ。」

礼拝堂に立っていたコトミネが返事をする。

「それならさつきすれ違ったけど。」

「そうですか、では、セイバーも合流したので、此れより聖杯大戦を開始します。」

そう宣言するコトミネ。

「他の方達が奥にいると思うので呼んで来てくれないでしょうか。」

「ああ、その事なんだけど……。」

「何かありましたか?」

「バーサーカーの野郎が敵の本拠地に殴り込みに入ったぞ。」

「えっと、本当ですか?」

「一応ライダーとアーチャーが着いて行ってたけど……。」

コトミネにしてもこれは予想外だったようだ。

「そうですか…、では、アサシンは敵地の偵察に行ってくれないでしょうか。」

「ライダーとアーチャーが行ってるし、十分じゃない?」

「いえ、アサシンには彼らとは別の地点からトウリファスに侵入、そのまま黒の陣営の本拠地であるミレニア城塞を偵察して来てください。」

「此処の防衛とかは?」

「キャスターとランサーがいれば此処の防衛には十分でしょう。」

「「えー！働きたく無い!」」

「いいからとつと行つて来い、我がマスターを困らせるな。」

キャスターが霊体化を解除して言う。

「分かりましたよ。行つて来るぜ女帝様。」

「帰ったらイイコトしてくださいよ、ご褒美も無しに仕事なんてで

きませんから。」

「巫山戯ているのか貴様ら…。」

そう言いながら扉へと歩いて行くクウエンサーとハイヴィア、
「そういえば、あの車まだ使っていていいのか？」

「ええ、構いませんよ。」

「分かった、壊しても文句は言うなよ。」

そう言って、扉から出て行く。

二人が去ってしばらくして、キャスターが聞く。

「マスター、彼奴らは使えるのか？」

「分かりません、ですが…。」

二人が出て行った扉を見る。

「使えなかったら、それまでです。」

停めてあった車に乗り込むクウエンサーとハイヴィア、

「クウエンサー、地図寄越せ地図。」

「はいはい、それにしてもこうしているとオセアニアの時を思い出さない？」

「ああ、あの0.5世代の時か、懐かしいな。」

「それもだけど、二回目のオセアニア派兵の時とか。」

「そういえばあの時、テメエかなり良い思いしてたよなあ！テメエだけ良い思いしててこのハイヴィア様には何も無いのっておかしいと思うんだが！」

「日頃の行いじゃない？」

「少なくともテメエよりはいいと思うんだがな。」

「まあまあ、そう言うハイヴィアも…あれ？」

「こちららテメエと違ってラツキースケベなんて無かったんだよ！」

キレルハイヴィア、確かにクウエンサーのラツキースケベは多かった。

「そういえば、当たり前だけどこの時代にオブジェクトって無いんだよね。」

「言われてみれば、オブジェクトと戦わなくて済むのか…。」

「オブジェクトも無いし、偵察だけでいいし、この仕事結構楽なんじゃない?」

「ならとつとと終わらせて美味しいモンでも食いに行こうぜ。」

「じゃあ、行きますか。」

そんなこんなで森である。

黒の陣営の本拠地、ミレニア城塞の東側に位置するイデアアル森林、ここにクウエンサーとヘイヴィアの二人は到着していた。

「それにしても、割と準備に時間が掛かったな。」

「そうだな、もう夜になっちまったぜ。にしてもテメエ…。」

ヘイヴィアが訝しげに聞く。

「クウエンサー、テメエそんな荷物抱えて森に入るのか? 此処は敵の本拠地の隣、トラップもたらふく仕掛けられてるだろ。」

「大丈夫だよ、間違っても一般人が引つ掛からないように森の入り口付近にはトラップは仕掛けられていない、それに…。」

自分の背中を指差すクウエンサー、大型のバックパックを背負っている。

「コツチもここにトラップを仕掛けておけば、次にここで戦闘が起きた時にこちらに有利なポイントを作れる。」

「ああそうかよ、その辺りはテメエに任せる。」

「何言ってるんだヘイヴィア、お前にも手伝ってもらうぞ。」

そう言いながら森に入る、暫らく歩いて行くと急にヘイヴィアが肩を掴む。

「止まれクウエンサー。」

「どうしたんだよ、虫でもいたか?」

「いや、そこに何か刻んである。」

そう言つて地面を指すハイヴィア、そこには何か紋章のような物が描かれていた。

「うわっ、これ多分トラップだよ。多分踏むと反応するタイプだと思う。」

「気を付けろよ、ここでテメエが引つ掛かかると俺まで巻き添えを食らっちゃう。テメエと心中なんて死んでもしたくねえ。」

「もう一回死んでるじゃん。」

突っ込むクウエンサー。

「それにしても、良くこんなの見つけたね。」

「ああ、多分生前より視力が良くなってる。夜目も効くようになってるしな。」

「言われてみれば確かに、サーヴァントになつた影響かな？」

「それしかねえだろ。」

再び進み出すクウエンサーとハイヴィア、かなりの距離を歩くと、道の右側が崖の様になっている場所に出た。

「ここなら位置も丁度いい、ここにしよう。」

「そう言つても何を仕掛けるんだ、ワイヤーか？」

「いや、丁度いい所に崖があつたからね、これを使おう。」

そう言つてバックパックから折り畳まれたスコップを二本取り出す。

「要はラッシュと戦つた時に道を塞いだだろ。それと同じだ。この土壁を崩して敵を生き埋めにする。」

スコップをハイヴィアに手渡し、バックパックから鉄板を取り出す。

「まずはこの土壁に穴を掘ってくれ、そこに信管を付けたハンドアックスを放り込んでから鉄板で蓋をして、衝撃が穴の奥に行く様にする。」

そう言つて土を掘り始めるクウエンサー。

「畜生、土木作業かよ、こういうのは工兵の仕事だろ！俺の本職はレーダー分析官なのに……。」

「でもハイヴィアが椅子に座つてるイメージ無いんだけど。」

「そりやあテメエと一緒に最前線に送られ続けたからだよ！」
そんな事を話しながらも、手はしっかりと動いている。

「よし！掘り終わったぞこのヤロウ！」

「お疲れ様、じゃあ入れてくよー。」

穴の奥へとハンドアックスを投げ込んでいく。そして鉄板を固定して、トラップが完成した。

そこから歩きながら要所にトラップを設置していく、地雷の様に爆弾を埋め、ワイヤートラップを仕掛けていく。

また暫らく歩くと、少し視界が通った場所に出る。

「お、あの城じゃないのか。」

「じゃあ、此処から偵察するか。」

そう言つて伏せるクウエンサーとハイヴィア。

ハイヴィアはライフルのスコープを、クウエンサーは双眼鏡を覗き込む。

「見える見える、結構人が巡回してるな……。」

「おい、あそこに見えるのつてゴーレムとかいうヤツじゃないか？」

「本当だ、パワードスーツとどっちが強いんだろう……。」

そんな事を考えるクウエンサー。

「それにしても、楽な仕事だな。」

「本当にね、偵察だけでいいし、オブジェクトも出ないし。」

「ああ、こんな仕事とつとと終わらせて帰るぞ。」

雑談するクウエンサーとハイヴィア。

「そういえばお菓子持ってきたけど食べる？」

「何でそんなモン持ってきてんだよ、食べるけど。」

「どうせ戦闘なんてしないしね。それに生前は作戦中は消しゴムみたいなレーションばかりだったし。」

「あれがフラグだった！絶対あれがフラグだった！」

「黙って走れクウエンサー！追いつかれるぞ！」

全速力で走るクウエンサーとヘイヴィア、彼らは大量のゴーレムに追われていた。

「テメエがあんな話始めるからこんな事になったんだよ！」

「ヘイヴィアだって乗り気だったじゃんか！」

走りながら喧嘩する二人、見つかった理由も、女湯ののぞきについて話していた際、それを感知されたといった、バカバカしいものだった。

そして二人は気が付かなかった、別の場所で行われていた戦闘が終了していたことを……。

七人の小人と杭の森 ルーマニア山中偵察戦VI

イデアル森林の、クウエンサー達の現在地とは少し離れた場所、此地に赤のバーサーカー、スパルタクスはいた。

何本もの杭に貫かれ、泥の様なもので覆われて意識を失っている状況だが……。

「むっ？」

「どうした、ダーニックよ。」

そのスパルタクスの正面に、二人の男がいた。一方は騎乗し、槍を持った男である。彼は黒のランサー、オスマン帝国の侵略から幾度も領地を守り抜いた護国の鬼将、ブラド三世である。

「いえ、王よ、侵入者が現れた様ですが、如何いたしましたでしょうか。」
そう答えるのはダーニック・ブレストーン・ユグドミレニア。黒のランサーのマスターである。

「現在侵入者はゴーレムに追われており、逃走している様ですが……。ライダーを呼び戻し、追撃させるのは如何でしょうか。」

「それには及ばぬ。」

「と、申されますと……。」

「ああ、余が行こう。我が領地に侵入した蛮族達だ、バーサーカーは確保したが、少し見せしめがあっても良いだろう。」

そうランサーは言う。

「待っておれ、我が領地に侵入した愚か者よ。」

「ヤバイヤバイ追いつかれるぞー！」

「うるさいハイヴィア！もう少してトラップを仕掛けた所だ！」

走るクウエンサーとハイヴィア、彼らは非常に阿保らしい理由で感

知されゴーレムに追いかけていた。

「おい、アソコだろ、トラップ仕掛けたの！」

そう言い前方に見える土壁を指すハイヴィア。そこはこの森に来た時に設置したトラップが仕掛けられている。

「OK、起爆するぞー！」

起爆用の無線機を取り出し、スイッチを押す。

ドムツ！ とくぐもった音が響いた。穴の中で起爆した事による衝撃は、設置した鉄板によって奥に向かう。そしてクウエンサーとハイヴィアが走り抜け、ゴーレム達が土壁の前に差し掛かった瞬間、土壁が砕け、ゴーレム達の上に雪崩れてきた。大量の土砂がゴーレムを押し潰して動きを封じる。

「いや、何とかなったな。」

「全く、どうなることかと思ったよ。」

「つたく、テメエといると気が休まらねえ。」

「まーまー、こうして無事なんだしいいじゃん」

「んじゃ、追撃が来ないうちにとつと帰りますか。」

埋まったゴーレムに背を向けるクウエンサーとハイヴィア、そして一歩踏み出し……。

「ぶべらっ！」

「何やってんだクウエンサー、お前がドジっ娘みたいな事してもどこにも需要がねーよ。」

木の根に足を取られてすっ転ぶクウエンサー、それを起こそうと手を取る。

だが、クウエンサーの背後に目を向けた瞬間、ハイヴィアの顔に驚愕が浮かんだ。

「おらあー！」

繋いだ手を振り回してクウエンサーを投げ、その反動で自身も飛び退くハイヴィア、突然の事に驚くクウエンサーだったが、

「カズィクル・ベイ
「極刑王」

突如、先程まで二人の立っていた場所に何本もの杭が生えた。

「躲したか、我が領地に侵入せ愚か者共よ。」

そう言いながら一人の男が歩み出てくる。その威容、その圧力は人間では出せまい、それはまさしく

「サーヴァントだとツ……………」

「如何にも、余は黒のランサー、ヴラド・ツエペシユである。貴様達は赤のサーヴァントであるな。」

「ああそうだよ。それがどうした。見逃してでもくれるのか？（おどうすんだよクウエンサー！）」

「この空気で見逃してくれる訳ないじゃんか。（どうにかして隙を作る、その間に全力で逃げるぞ。）」

「貴様らのバーサーカーは此方が確保した。隷属させ、手駒として使役する予定だが、少しばかり、サーヴァントですらこうなるという見せしめが必要だとは思わないかね。」

「あの筋肉ダルマ捕まったのかよ！」

「つまり…。」

「ああ、貴様らを

ランサーが話し出した瞬間、先程の会話の間にポケットから出していた携帯端末を顔面に向かって投げつける。武器ですらないそれを当てた所でダメージは零だが、この時代にタッチパネル式の携帯端末は存在せず、聖杯から送られる「現代」の知識にはそれは存在しない。

さらに、攻撃方法のわからないサーヴァントがよくわからない物体を此方に投げてくるといふ状況、その状況で当たり前に行く選択肢を取るのにはバーサーカーぐらいだろう。実際に……………。

「フッ！」

首を傾けただけで携帯端末を躲すランサー、だが、その隙にクウエンサーとハイヴィアは踵を返し、全速力で逃走を開始していた。

「ほう、逃げるか。ならば追い付いて串刺しにしてくれよう。」

そう言つて馬に乗るランサー、その顔には深い笑みが浮かんでいた。

「クウエンサー、追ってきているか？」

「あの状況で追って来ない訳が無いだろ。それに、奴の後ろに馬がいた。多分あれに乗って追いかけてくる。」

「マジか、どうするんだよ。」

「だから今トラップを仕掛けているんだろ。」

先程の場所から離れた場所。そこでクウエンサーとヘイヴィアはトラップを仕掛けていた。

「それに、逃げる時にスキルの気配遮断を使ったとはいえ、さつきゴレムに見つかつてるからね。時間稼ぎにしかない。」

そう言いながら木の地面から20cm程の所にワイヤーを結んでいく。そしてそのワイヤーを離れたところにある木に結びつけていく。

「つたく、コレに何の意味があるんだよ、こんな事している間に遠くへ逃げた方がいいんじゃないか。」

「それだと追いつかれる。此処で暫く動けなくしてから逃げた方がまだ確率は上がる。」

「それは分かったがこのワイヤーはどんな効果があるんだ？まさかコレで足を引っ掛けて転ばせます。とかいうんじゃないだろうか。」

「いいや、その通りだ。」

「はあ？巫山戯てるのかテメエ。」

「このトラップで転ばせるのは馬の方だ。転ぶかバランスを崩した所に、お前が木の上から弾をばら撒いてくれ。」

そう言っ側生えている木を指差すクウエンサー。

「テメエはどうするんだよ。」

「俺は奴をこのトラップに誘導する為に囿になる。」

何か走るような音が森に響く。そしてそれは徐々に此方へと近づいて来る……。

「来るぞヘイヴィア、準備してくれ。」

「死ぬなよ、テメエが死ぬと俺まで消える事になるからな。」

「それはフリか？」

「ちげーよー！」

そう言いながらスイスイと木に登って行くハイヴィア、そして向こうから馬に乗ったランサーが姿を現す。

背中からハンドアックスを取り出し、信管を突き刺す。さらに円筒形の缶を取り出す。

ワイヤーまで後5メートル、額を汗が一滴流れる。

ワイヤーまで後4メートル、

3メートル

2メートル

1メートル

そして、馬の脚がワイヤーに引っかかった。

馬がバランスを崩して転倒していく。だが、ランサーはその直前に飛び降りた。そこへ上からハイヴィアがフルオートで銃撃するが、

「極刑王ー！」

ランサーの盾となる様に、地面から杭が生み出される。それによりハイヴィアの放った弾丸は弾かれてしまう。

「どうやら、罫を仕掛け此方を討ち取ろうとしていたようだが、残念であつたな。」

クウエンサーに槍を突きつけながら言う。

「(どうすんだよ！このままじゃ二人とも殺される！)」

「(大丈夫だ、ハイヴィア、目を閉じていてくれ。)」

「そうだな。此処で起爆しても自分も巻き込まれる。」

そう言っって持っていたハンドアックスを捨てる。

「ほう、潔く諦めるか。」

「だが、此方は二人だ！」

もう一方の手に持っていた円筒形の缶を掲げ、起爆用の無線機を押す。ランサーは爆風を防ぐ為に杭を展開するが…

カッ!!

閃光が迸る。街で購入したアルミニウム粉末やマグネシウムなどを材料に制作したフラッシュバンが炸裂した。

通常であればこの様なものは役に立たないだろう。だが彼らはサーヴァントになり、生前よりも目が良くなり、夜目が効く様になっている。また森は暗く、目が闇に慣れていた。さらにクウエンサー達は知らなかった事だが、ヴラド三世はドラキュラのモデルであり、強い光は苦手である。そこに閃光を流し込まれたのだ。

「ああアアアアッ!!」

悶えるランサー、だがそれはクウエンサーも同じである。

「ヤバい痛いヤバい目がアアアッ!!」

そのクウエンサーの後ろ襟を掴み、目を閉じていたことで難を逃れたハイヴィアが全速力で引きずって行く。

「無茶にもほどがあるぞテメエ！テメエの死にたがりは治らねえのか!!」

「ちよつと待ってハイヴィア！お尻が、お尻が地面に擦れて痛い！」「待てるか！文句は後で聞く！」

そのまま森の中を走る。そして、遂に……。

「あれ、来る時に乗ってきた車だよな！」

「そうだからいい加減止まれ！もう此処までは追って来ない！」
そう言われてやつと止まるハイヴィア、緊張が解けたのか思わずへたり込む。

「逃げ切った……。」

「ああ、後は帰るだけだ。」

「運転するのめんどくせえ。クウエンサー代わりに運転しろよ。」

「俺免許取ってないんだけど。」

「そう言いながら車に乗り込む。」

「ああ！」

「どうしたクウエンサー。なんかあったか？」

「奴の目を逸らすために携帯端末を投げてしまった……。」

「嘘だろ！って事は……。」

「あんな画像やこんな画像が見れなくなった、って事だ。」

「テメエ、唯一の楽しみを……。」

「あの時は仕方が無かっただろ。」

そんな話をしながら車を発車する。

「それにしても、もったいない事をしたな……。」

「あん？」

「いや、あの携帯端末の中に、オブジェクトの図面とかも入れてたんだよ。何時でも眺められる様に。」

「キモッ……。」

「何でだよ！いいじゃん眺めて楽しむぐらい！」

・
・
・

「これは……。」

「先生、どうかしましたか？」

「いや、面白い物を拾ってね。」

森の中で話す二つの人影、その手の中にはクウエンサーの投げた携帯端末があった……。

かくれんぼには十秒数えろ シギシヨアラ夜間市街 地戦Ⅰ

ある教会の一室、その薄暗い部屋の中で三人の男が顔を付き合わせていた。

「いいのか？その選択で。本当に後悔はしないか？」

「ああ、テメエには、テメエにだけは勝たなきゃならねえんだよ！
そう啖呵を切る男。だが……。」

「こんな暗い所で何をしているんですか？アサシンにライダーも。」
そう言って部屋の扉を開けて入って来た男、彼はシロウ・コトミネ。
この聖杯戦争の監督役であり、キャスターのマスターでもある。

「ああ、ババ抜きとか言うゲームだ、アンタもやるか？」

そう答えるのはライダーのサーヴァント、真名はアキレウス。ギリ
シャ神話の大英雄である。

「因みに俺はもう上がった。」

「貴方もやっていたのですか？しかし、何故アサシンの二人はこ
んなにも迫熱しているのでしょうか？」

「最下位には罰ゲームがあるからな。」

「罰ゲーム、ですか？」

「ああ、負けた奴には町で色々を買って来て貰う事になっている。
食いもんとか酒とかな。」

「成る程、それであんなに迫熱しているわけですか。」

「まあ、あいつらからふっかけてきて負けてるのもどうかと思うが
な……。」

そう話している間にもゲームは続き、残りの札はクウエンサーが二
枚、ヘイヴィアが一枚となっていた。そして現在はヘイヴィアの番、
つまり此処でヘイヴィアがジョーカーを引けばゲームは続行、違う方
を引けば上がりとなる。

「おいクウエンサー、どっちがジョーカーだ？」

「そんなの答えるわけじゃないじゃん、右がジョーカーかもしれないし、

左かもしれない。」

「まあ、コツチだろうけどな。」

そう言つて右の札を引くヘイヴィア、引いた札は、ジョーカーでは無い。つまり、クウエンサーの負けである。

「何で、何で解つたんだ？」

「テメエ生前からジョーカーを左手側に置く癖があつただろ。治つてなくて良かったぜ。」

「マジかー。そんな癖があつたんだ。」

「つー事で、罰ゲームはテメエが行つてこい。」

「めんどくさいなあ。」

そんな彼らに話しかけるコトミネ。

「少し、よろしいでしょうか。」

「あれ、コトミネ来てたんだ。あんたもババ抜きやるかい？」

「いえ、それは良いのですが。」

「どうした、出撃か？」

「そう言う訳では無いのですが……。」

そう言つてポケットからメモの様なものを取り出す。

「幾つか切らしてしまいそうな備品が有りまして、町に行くならついでに買つて来てはくれないでしょうか。」

「うわ、結構量があるな、ヘイヴィア、車出してくれない？」

「結局俺も行くのかよ！勝つたのに！」

「すみませんが、よろしくお願いします。此方は少し用事が有りまして……。」

「わかったよ行けばいいんだろ行けば！」

「俺の酒も頼むぞ。」

「ライダーもか、了解だ。」

「暗くなる前に帰つて来るんですよ。」

「そんな子供じゃないんだし、大丈夫だろ。」

「いつ敵のサーヴァントが襲つて来るか分かりませんからね。」

「うっわ、思ったより物騒な理由だった。」

そう言つて立ち上がるクウエンサーとヘイヴィア、

「それじゃ、行って来るわ。」

「気をつけて行くんですよ、それと、お釣りをちよろまかさないように。」

「分かってるよ。」

「いや、貴方たちこの間だいぶ誤魔化しましたよね。」

「いやー、聞こえないなー。」

そう言つて部屋を出る。暫く歩いていると、ぽつりとハイヴィアが口を開いた。

「クウエンサー、サーヴァントをパシリに使うマスターつてどうなんだろうな。」

「まあ、サーヴァントつて元々召使いとかそういう意味じゃなかったっけ。」

「意味としては合ってるって訳か。」

「生前から俺達何でも屋として扱われている感じは有るけどな。」

そんな事を話しながら車に向かうクウエンサーとハイヴィア、

「にしても、敵にはこの間の黒のランサーみたいなのが後七騎もいるんだろ。あんなバケモンが七騎もいるとか、考えたくもねえよ。」

「まあ、コッチもバケモンが揃ってるしね。」

「俺ら以外な。」

「俺達も一応、サーヴァントの筈なんだけどな。」

「神話の大英雄と一兵卒を比べちゃダメだろ。それに、あいつらは一人一人がオブジェクトみたいな物だよ。」

「はあ、戦いたくねえな。」

「本当にね。」

そう言つて車に乗り込む。

何だかんだで、彼らは今日も通常運転であった。

かくれんぼには十秒数えろ シギシヨアラ夜間市街 地戦Ⅱ

「クウエンサー、頼まれていたものはこれで全部か？」

「いや、後洗剤を買ったら終わりだ。」

「つたく、サーヴァントをパシリに使うなよ。」

賭けに負けたため、シギシヨアラの町へ買い出しに来たクウエンサーとハイヴィア、買い物が終わらせる為、入店しようとするが、

「おう、久しぶりじゃねーか。」

そう言われて肩を掴まれた。

当然だが、未来から来た二人にはこの町に知り合いなどいるはずがない。

では、肩を掴んでいる、コイツは誰だ……。

警戒しながら、ゆっくりと振り向く。

そこには、見覚えのない少女が立っていた。

「よっ！久しぶりだな！」

「いや、誰だお前！」

二人のツツコミが朝のシギシヨアラに虚しく響いた……。

シギシヨアラで発生した連続殺人事件。潜入した魔術協会の魔術師全員が殺害され、敵サーヴァントによる魂食いが行われた。

神秘の隠匿の為、魔術協会のロード・エルメロイ二世より赤のセイバーのマスターである獅子劫界離へ、対応が要請された。

「確かにそいつは、俺の仕事だ。」

そう言っつて電話を切り、頭の中でこれからのプランを構築し始める。

ある程度の目処がつき、自らのサーヴァントであるセイバーへと状況を説明しようと目を向けるが、

「どこ行つたんだ、あいつ……。」

猫と戯れていたはずのセイバーが影も形も見当たらない。

「(仕方ない、探しにいくか。)」

そう思い、席を立とうとした時。

「マスター、いいもん拾つて来たぞ！」

「何処に行つていたんだ、お前。」

セイバーが帰ってきた。だが、

「何を持ってきているんだ？」

「へっへー、これはだな……。」

そう言つて手に持つていたものを前に出す。それは、

「あれ、セイバーのマスターじゃん。」

「て事はこいつがセイバーかよ。」

首を後ろから掴まれて吊られたクウエンサーとハイヴィアであつた。

「アサシンか、何故こんな所に。」

「コトミネに備品の買い出しを頼まれてな。その途中でセイバーに捕まつた。」

「そうか、うちのセイバーが済まないな。それといい加減に離してやれ。」

そうセイバーに言う。

「よつと、」

手を離され、地面に着地するクウエンサーとハイヴィア。

「そういえば、さっきの電話は何だったんだ？」

「あー、そうだな。」

チラリとクウエンサーとハイヴィアに目を向ける。

「俺達は聞かない方がいい話題か？」

「いや、大丈夫だ。むしろお前達にも手伝ってもらいたい。」

「はっ？」

「と、言う訳だ。」

先程までの電話の内容を説明する獅子劫。

「つまりは、俺らにそのサーヴァントの撃破を協力しろと言う訳か？」

「そうだ、頼めないか？」

「そんなんに付き合ってられるか、ハイヴィア、とつとと帰るぞ。」

「実際に敵とやり合うのはうちのセイバーだ。お前達には援護してくれるだけでいい。」

「絶対に嫌だ。給料の出ない仕事なんてしたくねえ。」

「多少の報酬は出すぞ。」

それを聞いてピクツと反応するクウエンサーとハイヴィア、彼らには現在どうしても欲しい物があった。

「話だけは聞いてやる。」

そう言つて座り直すクウエンサーとハイヴィア。

「手伝ってくれるのか？」

「ああ、だが先に報酬を払って貰いたい。」

場に緊張が走る。彼らは一体何を求めて来るのか。貴重な魔術触媒だろうか。はたまた令呪そのものと言う可能性も……。

セイバーが警戒を強める。そんな中、クウエンサーとハイヴィアバカ二人が口を開く。

「「じゃあ、エロ本で」」

「エロ本……。」

「EROHON?」

「エロ本?!」

驚愕する獅子劫とエロ本が何か良く解っていないセイバー。

「お前達そんな物でいいのか?もつとこう、魔術触媒とか、情報とか。」

「そんな物よりもエロ本だ!!」

「そうだ!こちら見た目が未成年なせいで売ってもらえなかったんだよー!」

「お、おう、そうか。」

あまりの剣幕にたじろぐ獅子劫。

「なあ、マスター。」

「どうしたセイバー、お前までエロ本が欲しいとか言い出すんじゃないだろうな。」

「エロ本って何だ？」

「……。」

「何だよ。」

「お前は、その純粋なまままでいてくれ……。」

「はあ？」

・
・
・

「それじゃあ、ちよつとコトミネに連絡して来るよ。」

そう言つて電話を手に離れるクウエンサー、残されたハイヴィアにセイバーが話しかける。

「お前達は何処の英霊なんだ？」

「そういえば俺も気になっていた。小銃を出すわ着ている軍服は調べても何処の物がわからないわ、一体何処の英霊だ？」

「ああ、その話か。」

顎に手をやり、少し考える。

「まあ、特に話しても問題はないか……。」

ハイヴィアが自分たちの真名について説明しているのを横目に、コトミネに電話をかけるクウエンサー。

コール音がなり、三回目で相手が電話に出た。

「もしもし、アサシンですか。帰るのが遅れているようですが何かありましたか？」

「ああ、それが……。」

かくかくしかじか。

獅子劫に説明された事を伝える。

「そうですね、分かりました。」

了承するコトミネ。

「ですが、明日の昼までには帰ってきてくださいね。」

「何かあるのか？」

「ええ、」

少し楽しそうに、コトミネは言う。

「黒の陣営の本拠地、ミレニア城塞へと攻撃を仕掛けますので。」

かくれんぼには十秒数えろ シギシヨアラ夜間市街 地戦Ⅲ

「タルタルソースってあるじゃん。」

「どうしたクウエンサー、エビフライでも食べたくなつたか？」

「タルタルソースってどんなやつだ？」

夕焼けに染まるシギシヨアラの町、その一角のベンチに三人の人影があった。

「マヨネーズにみじん切りにしたピクルスとか茹で卵を混ぜたソースだ。それがどうしたんだ。」

「あれってエビフライとカキフライを食べる時にしか使う事無くない？！」

「確かにな……。突然どうした？」

「あまりにも暇だったからね、ふと思いついた事を言っただけだよ。」

「そうか、セイバー、何か話題はないか？」

「エビフライか、食べてみてえな。」

「食べたことないのか？」

「生前はそんなモン無かつたし、何より食糧事情がな……。」

「ウチも消しゴムみたいなレーションばかりだったな。」

「しかしお前達、よく食うな……。」

呆れた様に言う獅子劫。彼は赤のセイバーのマスターとしてこの聖杯大戦に参加した魔術師である。

「オレの食事は趣味だよ。折角肉体があるんだからな。」

そう話す少女は赤のセイバー、手にスナック菓子の袋を抱えている。

「そうそう、食べれる時に食べておいた方がいいよ。」

「いつ倒されるかわからねえからな。」

そう言いながら手に持ったホットドッグにかぶりつく二人、彼らは赤のアサシン、クウエンサーとハイヴィアである。

彼らは魂食いを繰り返す黒のアサシンをおびき出す為、此処シギシヨアラに待機していた。

「そういえばアサシン、爆弾を仕掛けるとか言っていたが、それは終わったのか?」

ふと思いついたように獅子劫が聞く。

「大丈夫だ、もう完了している。」

「むしろ戦闘後に回収するのがめんどくさくなる様な数仕掛けたからな……。」

「一応何処に仕掛けたかは地図に記入しているけど、見えにくいようにしているしね。」

そう答えるクウエンサーとハイヴィア。

「……。」

それを物言いたげに見つめるセイバー。

「どうした?何かあったか?」

「いや、何と言うか……。」

言いよどむセイバー。

「サーヴァントらしくない戦い方だと思ってな。」

「まあ、アサシンだし。仕方ないと思うよ。」

「生前はあくまでオブジェクトのサポートとして動く役割だったからな。」

「途中から何故か生身でオブジェクトと戦うハメになってたけどね……。」

「お、おう……。」

テンションが急降下していくクウエンサーとハイヴィア、見兼ねた獅子劫が声をかける。

「そろそろ行くぞ。セイバー、鎧を身に付けておけ。」

「おう!出陣だ、マスター!」

立ち上がり、一瞬の内に鎧を装着する。

「お前達も、とつと立ち上がってくれ。」

ベンチに座り、うな垂れるクウエンサーとハイヴィアに言う。

「はあ、行きたくねえな。」

「本当にね、めんどくさいにも程がある。」

それでも立ち上がらない二人に業を煮やしたのか、セイバーがツカツカと歩み寄った。

そして、ガツ！と首根っこをひつつかむ。

「いいから行くぞ！」

「グエ！もうちよつと優しく運んでくれよ……。」

「テメエは子供を運ぶ母猫か何かか！」

ピクリ、とセイバーの動きが止まる。

「母、か……。」

「あん？どうした？」

「いや、何でも無い。行くぞ。」

何でも無いように歩き出すセイバー。

「つたく、仕方無えな。」

「さて、それじゃあ。」

「働きますか。」

シギシヨアラのある建物、その一室に二人の人影があった。

「また魔術師が来てくれたみたいだよ？」

「それじゃ、シギシヨアラでの最後の食事にする？」

「うん、そうしよ！」

「でもお母さん、今日は見に来ちゃダメ。サーヴァントがいるみたいだから。」

「わかった、ハンバーグ作って待ってるわね。」

「うん！」

部屋の中には、一人の女性だけが残った。

「やっぱりゴーレムはいいな。命令に決して逆らわない!」

ミレニア城塞の地下空間、ゴーレムを生産する為に作られたそこに一人の少年がいた。

彼はロシエ・フレイン・ユグドミレニア。

黒のキャスター、アヴィケブロンマスターである。

「それにしても、先生は凄いな。あれだけの凶面からこんな物を作り出してしまふなんて!」

興奮した様子でまくし立てるロシエ。

「でも先生の宝具はもつともつと凄いなだろうな!早く見てみたいな!」

「この聖杯戦争に勝ち抜いて、僕は先生を受肉させる。そしてゴーレムの秘術を習うんだ!」

「最強のゴーレム、何にも負けないゴーレム、その為になら、サーヴァントだろうがマスターだろうが何人来ようとコレで打ち倒してやる!」

ふと、疑問に思う。

「そういえば、この凶面を落として行ったのはどんなやつ何だろう?そのおかげでコレが造れたんだけど……。」

背後に目をやるロシエ、そこには、地下空間を埋め尽くすように、余りにも巨大な物体が鎮座していた。

全長は60m程だろうか、中心の50m程の球体状の構造物の右側には、10m以上の長さの砲が取り付けられている。また、球体表面には無数の砲がハリネズミのように据え付けられている。

それは一つの世界で最強を誇った兵器^{バケモノ}。核も効かず、同じ兵器^{バケモノ}でしか破壊出来ないとされた悪魔の化身。

ブオン、と、その表面に青く発光するラインが無数に現れた。

さあ、兵器^{オブジェクト}の王が目覚めます。

かくれんぼには十秒数えろ シギシヨアラ夜間市街 地戦Ⅳ

「何だ！お前達は！」

黒のアサシンを撃破する為セイバーとそのマスター、獅子劫界離と行動を共にするクウエンサーとヘイヴイア。

彼らは黒のアサシンをおびき出すためシギシヨアラの路地を歩いていた。歩いていたのだが……。

「鎧……う・それに銃まで……。そこを動くなよ！」

「まあ誰でもそこつつこむよね。」

「確かに、今の俺らはどう見ても不審者だからな……。」

地元の警官にピストルを向けられかけていた。

確かに、夜道に甲冑を着込んだ人間と軍服に小銃を下げた男がいたら警戒するだろう。

「どうする？気絶させる程度なら直ぐにできるぜ。」

「いや、それには及ばん。」

そう言つて啜えていた煙草を持ち、空中に文様のような物を描く獅子劫。

「我々は内務省公安部の者だ、この現場は任せてくれ。」

それを受けた警官は焦点の合わない目で返事をし、フラフラと引き返して行った。

「つたく、早いとこ片づけないと神秘の隠匿もあつたもんじやないな。」

「今の魔術か？便利そうだな。」

「おい、なんか妙じゃねえか。」

それまで黙つて周囲を警戒していたセイバーが口を開く。

そう言われて気がつく。彼らの周りには先程までは無かつた筈の霧に包まれていた。

「この霧は……。」

「なんだこれ、さつきまでは無かつたよな……。」

それを吸った獅子劫が突如、激しく咳き込む。

「ゴホツゴホツ!!」

「どうしたんだ獅子劫!」

「毒だ! 吸うな、セイバー!」

「こんなのが効くかよ!」

たまらず膝をつく獅子劫。着ていた上着を口に当て、毒を吸い込まないようにする。だが……。

「やばいナニコレ喉が痛ガホツ!」

「何やってんだクウエンサー! テメエも吸ってんじやねえよ!」

「ともかくこの霧から逃げるぞ!」

そう言つて獅子劫に肩を貸すセイバー。同じ様に、クウエンサーもヘイヴィアが肩を貸して運ぶ。少しの距離を走り、霧の無い所へ出る。

少し広いそこで、息を整える獅子劫。

クウエンサーも大きく呼吸する。

「うっし、抜けた。」

「あー、やっと楽になった。」

息を整えた獅子劫が口を開く。

「おい、これから

だが、彼はその先を言葉にする事は出来なかつた。

その瞬間、彼の喉元にナイフが突きつけられていた。あと数センチ押し込めば容易く獅子劫の生命を刈り取るだろう。

咄嗟の事にクウエンサーとヘイヴィアは反応出来ない。いち早く反応したのはセイバーだった。

獅子劫の足を払い、浮いた敵のナイフを弾き飛ばす。

そこへ硬直から回復したヘイヴィアがライフルを腰だめに構えて撃つが

ギイン!!

腰の後ろから抜いたナイフに弾かれる。そして少し離れた位置へ着地する敵、いや、このタイミングで攻撃を仕掛けて来るのであれば、黒のアサシンに違いなйдらう。

そして、止まった事でようやくその姿が見える。だが、

「なっ！子供だとツ……！」

「切られちゃった、ヒドイことするね。」

「それにそっちのあなたも、あんなに沢山撃つて。あぶないよ。」

「何がヒドイだ、魂食いをやってるテメエなんぞに言われたかねえな！」

剣を突きつけるセイバー。だが、黒のアサシンは何が駄目なのかわからない幼子の様に首を傾げる。

「別にいいじゃない？ねえ！」

同時に何本ものナイフを投擲するアサシン。そして霧の中へ後退する。

「ここで待ってる、マスター。」

「任せる。」

そう言つて飛来したナイフを弾きながら追撃するセイバー。それを追う様に、ヘイヴィアも口元に布を巻いて走り出す。

「援護する！クウエンサー！テメエは獅子劫を護衛してろ！」

「ああ、了解だ！」

そう言つて霧の中に飛び込む二人。

「そっちはテメエに任せたぞ、ヘイヴィア。」

・

・

「これぞ懐かしき我が庭園、ハンキング・ガーデンズオブパビロン虚栄の空中庭園よ。どうか、マス

ター？」

「素晴らしい、私の要望もきちんと組み込まれていますね。」

「そうであろう、何故かあのアサシンの要望も聞くことになってしまったが。」

「アサシンの要望……。ああ、アレですか。」

そう会話する赤のキャスター、セミラミスとそのマスター、シロウ・コトミネ。

「黒のサーヴァント共も、流石に度肝を抜かれるであろうなあ。」

「ええ、黒のセイバーが消滅した今が好機、こちらのセイバーも、すでに動き出しています。」

「一大決戦よなあ、派手な幕開けを期待するのでしょうか！」

「行こう、キャスター。」

手を空にかざし、握り締めるコトミネ。まるで何かを掴むかのよう

に。
「悲劇は繰り返さない、大聖杯も、俺達の物だ。」

「それはそうと、そのアサシンめは何処へ行ったのだ？」

「言って無かったですか。セイバーと一緒に黒のアサシンの撃破に向かいました。」

「明日までに間に合うのか？」

「さあ……。」

かくれんぼには十秒数えろ シギシヨアラ夜間市街 地戦V

ギイン!!

赤のセイバーが飛来したナイフを弾き飛ばす。

「わあ、なかなかやるね!」

霧の中に黒のアサシンの声が響く。だが、その姿は霧に紛れて確認することが出来ない。

「ぬかせアサシン風情が!」

「一応俺もアサシンなんだが…。」

ぼそりと呟くヘイヴィア。彼らは黒のアサシンを追い、アサシンの生み出した霧の中に入っていた。

「貴様など英霊ではない!ただの殺人鬼だろうが!」

「あれ?なんでわかったの?」

「なに?」

予想外の返答に驚く赤のセイバー。その肩にフツ、と小さな重みが加わる。

「わたしたちの名は、ジャックザリツパー。」

「なっ!」

耳元で囁かれた声に驚きながらも払いのける。だが黒のアサシン、ジャックザリツパーは猫の様に音も無く着地する。

「ねえねえねえねえ!あなたのお名前、教えて頂戴?」

そこへ斬り下ろしとヘイヴィアの銃撃が襲いかかるが、セイバーの肩の上を側転倒立する様にして避けられる。

それを払う様に切るが、回避され、再び霧に紛れる。

「やっぱり、あなた女の人なんだ!」

「おいセイバー、このままじゃ罅が明かねえぞ!」

うんざりした様にヘイヴィアが言う。

「分かっている！舐めんなよ、クソ餓鬼が！」
兜を解除し、素顔をさらけ出す。

「赤雷よー！」

セイバーが掲げた剣から、四方八方に赤い稲妻が撒き散らされる。それにより、周囲に充満していた霧が霧散していく。

「終わりだアサシン、今のうちに思う存分泣き叫べ。」
剣を突き付け言う。

「首を刎ねられりや、悲鳴も上げられなくなるってもんだ。」

「あはははっ！」

黒のアサシンが笑う。

「やだよー！まだお腹すいてるんだもん！」

そう叫び、腰からナイフを抜いて突撃を仕掛ける。

それに合わせるかのようにセイバーも踏み出す。

「ならば後悔しろー！ジャックザリッパー！」

そして二人が激突する……。

「上だ!!セイバー!!」

ハイヴィアが叫んだ。

その瞬間、辺りは爆炎に包まれた。

その衝撃は離れた場所で待機していたクウエンサーと獅子号にも届いていた。

「なんだ、お前の爆弾か？」

「いや、起爆はしていない筈だ。」

その時、クウエンサーの無線に通信が入る。

「…クウエンサー、新手のサーヴァントだ！そいつに爆撃された！」

「ハイヴィア、状況は？」

「セイバーも俺も無傷だ、現在ソツチに向かっている。黒のアサシンは南西方向に逃走、少なからずダメージを負っている。」

「そうか、じゃあ俺は引き続き獅子劫とここに来ると思う敵マス

ターを……。」

「いや、テメエは黒のアサシンを追撃してくれ。」

「は？」

ナニヲイツテルンダコイツハ、

「いやいやいや、俺一人で倒せるわけ無いだろ。」

「いや、そうも言ってもらえねえ。」

声から焦りが感じられる。

「ヤツの真名はジャックザリツパーだ。」

「嘘だろ……。」

「残念だが本当だ。今のヤツは傷を負っている。そのダメージを癒すために一般人をも襲いかねない。」

ジャックザリツパー、19世紀のロンドンに現れた連続殺人鬼である。そんなモノが手負いのまま動いている、それはどれだけ危険な事だろうか。

「クソツ！やるしか無いのか……。」

「コツチのサーヴァントは俺とセイバーでなんとかする。そっちはテメエに任せる！今動けるのはテメエしかいねえんだよ！」

「ああ分かったよ、やってやるよこの野郎!!」

そう叫んで無線を叩き切る。

「話は聞いていた。敵のマスターは任せろ。」

「ああ、逝ってくる。」

「お前……。」

「流石に冗談だよ、死ぬつもりはない。」

そう言って駆け出すクウエンサー。

「大丈夫かあいつ……。」

「ちっ、切られたか。」

所変わって敵サーヴァントに向け走るヘイヴィアとセイバー。
「アサシン、テメエはそっちの路地から隠れながら接近しろ。」

セイバーが右の路地を指差す。

「気配遮断使えるだろ。見えない敵がいると相手が思っているだけでも大分やりやすくなる。」

「了解だセイバー。」

そう言つて離脱するヘイヴィア。1、2秒でフツと先程まで感じていた気配が消える。

そこへ敵の放つ矢が着弾、爆発を起こす。

その衝撃で少し飛ばされるが着地。続けて放たれる矢を弾きながら獅子劫とすれ違う。

「敵のサーヴァントは引き受けた！」

「頼む、マスターの方は任せろ！」

それを聞き、走りながら叫ぶ。

「任せた!!」

ふと思う。

「まさかオレが、魔術師なんて輩を信用するとはな……。」

・

「さて、と。」

煙草を投げ捨て、視線を斜め上に向ける。

「自己紹介は、省いて構わないよな。」

「そうでしょうね、お互い名を知らない筈はありませんし。」

そう答える嫺やかな声、だが、その声は地上から7メートル程から発せられていた。

金属の四本の脚、節足動物を思わせるそれが、建物の外壁を掴む様にしてその少女、ファイオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアの体を支えていた。

「ただ、一応警告させていただけないでしょうか。」

「どうぞ。」

「立ち去りなさい、ネクロマンサー死霊魔術師。」

先程とは違う、凜とした声を発する。

「ここは遍く全て、千界樹ユグドミレニアの大地。踏み入った無礼は不問に処します。この警告を看過する様であれば、」

「死という等価をもって、愚行の代償を支払っていただきます。」

「へえ。で、俺が聞くと思ってるのか？」

「いいえ、でも、こうして宣言しておかないと、私の内側で覚悟が決まらないので。」

そう、にこやかに語るフィオレ。

「へえ。」

何かを呟く獅子劫、壁に貼られていたチラシが、意思をもっているかの様にフィオレの顔に貼りつく。

そして、一射目が放たれた。

かくれんぼには十秒数えろ シギシヨアラ夜間市街 地戦VI

さて、黒のアサシンを追撃すると言った所で、手負いとはいえ自分よりも敏捷値の高い相手に追いつけるモノだろうか。

「とか思ってたんだけどな……。」

「どうしたのー?」

「いや、なんでもないよ。」

正面を向く、黒のアサシンがいる。

もう一度向く。やっぱりいる。

「はあ……。」

考えてみれば簡単な事だった。

魔力が足りず、腹を空かせる黒のアサシン、そんなモノに魔力の塊であるサーヴァントが単騎でホイホイと近づいていったのだ。

向こうからしてみれば、餌が自分で寄って来るようなものだろう。

では何故クウエンサーはこんなにも落ち着いているのだろうか。

それも簡単なことだ。

目の前で自分の左手が喰われるのを見てしまえば、一周回って逆に落ち着くものである。

「(こんな状況、あの”島国”の言葉で何て言うんだっけ。)」

左手のあった場所から伝わる痛み能耐えながら、クウエンサーは考える。

「あ、あれだ。 絶体絶命。」

その瞬間、黒のアサシンのナイフが振るわれた。

赤のセイバーが壁を駆け登る。

先程までこちらを狙撃、爆撃していた敵を壁の上に目視する。

茶髪を後ろの低い位置で後ろに纏めた男だ。 弓を持っている事

から、アーチャーで確定だろう。

走りながらも思考する。

アサシンからの援護もある、

充分だ、ここで仕留める！

上から射られるが、避け、時には弾きながら接近する。

壁が途切れた所で一太刀目、紙一重で躲される。

だが本命は次！

上部にある塔に着地。そのまま傾斜を利用し滑り降りる様に接近する。

「獲ったぞアーチャー!!」

右から左への胴切り、そこから連続しての袈裟斬り、どちらも後ろに跳ぶ事で回避される。

「なにっ!!」

その体勢が崩れた所へ、アーチャーが落下しながら何本もの矢を放つ。

鎧や剣に弾かれる。だがその内の一本が、セイバーの上腕へと突き刺さった。

・
・
・
「(これは無傷では勝てんな……。)」

落下しながら壁を見上げる黒のアーチャー。その視線の先には、矢が当たったことで激昂し、赤雷を撒き散らす赤のセイバーが映っていた。

後転で勢いを殺しながら着地、右手を前に出し、左手を後ろに引き込み迎撃体勢を整える。

「くたばりやがれッ!!」

赤のセイバーが赤雷を纏い、魔力放出で彗星のように加速して降ってくる。

剣を振り下ろされた瞬間、左手でセイバーの腕を掴む。肩に刃が食い込むが、ダメージを無視して右手を脇腹へ。

ベクトルを捻じ曲げ、地面に叩きつけるようにして投げ飛ばす。

それは、古代ギリシャにて伝えられし、現代では失われた格闘技。

「失礼、これがパンクラチオンです。」

「ガハッ！」

吐血するセイバー、だが瞳は闘志が漲り、今にも襲い掛かるとする表情だ。

立ち上がるうとしたその時、

「避けるセイバー！」

後方から聞こえる声、その声は。

「遅えぞアサシン！」

そう答え、背後に振り向くセイバー。だが、一瞬でその表情が固まる。

それもその筈、ヘイヴィアが肩に担いでいる武器をセイバーもアーチャーも見た事は無いが聖杯からの知識により知っている。

それは近代において、兵士が単独で運用出来る中で最も破壊力の高い兵器の一つ。

携行型対戦車ミサイル

「テメエ俺ごと爆殺する気か!？」

「文句なら後で聞く! 全力で逃げろ！」

引き金が引かれ、弾体が黒のアーチャーに向け発射される。

シギシヨアラに、再び爆炎の花が咲いた。

・
・
・
「クッソ、キツいな……。」

脚を引きずりながら歩くクウエンサー、そのふらついている様子は一見すると酔っ払いの様だが、よく見るとシユルエツトがおかしいのが分かる。

まず左手は肘から先が存在せず、切断面はスッパリと切られたようになっている。

また、その身体には幾つもの切り傷が刻まれ、所によっては医療用

のメスが突き刺さったままになっている。

これらの傷は全て、黒のアサシンによって付けられたものだ。

黒のアサシンとクウエンサーの戦闘は完全にかくれんぼの様相を呈していた。

クウエンサーが隠れながら逃げ、それを黒のアサシンが追跡、襲撃する。そこからまたクウエンサーが逃走する。このやり取りをもう幾度も繰り返していた。

そして今も……。

「あはっ、見つけたっ！」

「チツ!!」

前に跳ぶようにして避ける。そこに上から降ってきた黒のアサシンがナイフを突き立てる。

「あなたしぶといね！普通だったらもう死んでるのに！」

「生憎、スキルで戦闘続行持ってるからなっ。」

「そっかー。でもそろそろお腹減った！」

そう言つてナイフを投擲する。

右肩に突き刺さり、倒れ込むクウエンサー。

そこに追撃しようと黒のアサシンが接近するが、

「これでも食らってるー！」

掌サイズの直方体が投げつけられる。

「また？」

それはハンドアックスという爆弾である。

しかし、先程から何発かクウエンサーが仕掛けたトラップを見た黒のアサシンはその効果範囲を既に把握していた。

後退し衝撃から顔を守る。だが……。

ゴトツ

「あれ？」

爆発が起きない。

それもその筈、そのハンドアックスには信管が付いていなかった。

「あっ！」

前を向く。既にクウエンサーは逃走しており、気配遮断によって気

配も追えなくなっていた。

「あはっ、あははははっ!!」

つい、笑いが漏れる。

「そっか、まだ逃げるんだ。楽しいなあ。早く殺して食べてあげない!!」

再び追跡を開始する。

「待っててね。すぐに殺してあげるから!」

かくれんぼはまだ続く。

かくれんぼには十秒数えろ シギシヨアラ夜間市街 地戦Ⅶ

「全く、無茶をしますね……。」

ヘイヴィアの放った携行型対戦車ミサイルを辛くも回避した黒のアーチャー、だが弾体の直撃は避けたが爆風までは防ぐ事が出来ず、右手に浅くはない傷を負っている。

周囲はもうもうと黒煙が覆い、赤のセイバーの状態も確認出来ない。

であれば、これ以上は不利となるばかりか……。

「すみませんマスター、仕損じました。」

赤陣営、セイバーのマスターである獅子劫界離対黒陣営、アーチャーのマスターであるフィオレ・フォルヴェツジ・ユグドミレニア。獅子劫の放った銃弾により始まったこの戦闘は現在、膠着状態に陥っていた。

一度はフィオレを追い詰めた獅子劫だったが、車で撥ね、体勢が崩れた所へ放った銃弾をフィオレの弟であるカウレス・フォルヴェツジ・ユグドミレニアの魔術により防がれる。そして体勢を立て直したフィオレからの銃撃により、獅子劫は遮蔽物としている車の裏に釘付けにされていた。

「こりゃあ、虎の子を使うしか無いか!」

手に持った、棒状の物体に目を向ける。だが突然、先程まで嵐の様に連射されていた銃撃が停止した。

「どうやらここまでの様です。」

そう声がかけられる。

「撤退するの?」

「ええ、次はトウリファスでお待ちしています。そちらで決着を着けましょう。」

言うが早いか、その場にいたもう一人、カウレスを小脇に抱え、壁

を跳んで撤退して行く。

「サーヴァントに何かあったか……。」

「(了解しました。ありがとう、マスター。)」

撤退する旨を念話で伝えたアーチャー、その時、

「くたばれえーッ!!」

黒煙を切り裂いて、赤のセイバーが突撃してくる。背後は壁、であれば……。

「逃げるかアーチャー!」

空中に跳んだアーチャーに向って、セイバーが吼える。

「ええ、このままでは、こちらの敗北です。お互いに痛み分けと言う事で。」

「テメエ!待ちやがれ!」

追撃しようとするが、アーチャーの射た矢に阻まれ、遂には見失う。

「チツ、くそつたれが!!」

思わず掴み取った矢を地面に叩きつける。そこへ声をかける男が一人。

「撤退して行ったか……。」

「アサシン、テメエ何であそこで俺ごと撃った!」

セイバーもヘイヴィアの放った対戦車ミサイルに当たりはしなかったものの、爆風により少しばかりのダメージを受けていた。

「済まねえ、だが、どうしてもこの戦闘を早く終わらせたかった。」

「どう言う事だ?」

「ああ、状況は最悪だ。」

顔を顰めて言う。

「クウエンサーの野郎が死にかけてやがる。」

シギシヨアラの路地は複雑に入り組んでおり、一本メインストリートから外れてしまえば地元民でもない限り迷ってしまうだろう。

そんな路地の奥、行き止まりとなった袋小路にクウエンサーは倒れていた。

その体は正に満身創痍、放っておけばスキルに戦闘続行があらうと後一時間もたたずに消滅するだろう。

「あはっ、もう逃げられないね!!」

「ああ、そうだな……。」

上体を起こし壁にもたれかかる。声のした方を向くと、黒のアサシン、ジャック・ザ・リップパーがニコニコと笑顔で歩み寄って来た。

「楽しかったね!ね、あなたもそう思わない?」

「いや、コッチはお前に殺されそうになってるんだが……。」

「もう、お前じゃなくてジャックって呼んでって言ったでしょ?それに、」

じゅるり、小さな赤い舌で唇についた血を舐める。

「殺されそう、じゃなくて殺すんだよ?」

「(ああ、今の動作エロいな……。)」

朦朧としているのか、全く関係の無い事を考えるクウエンサー。

「もっと遊びたいけど、そろそろ魔力も補給しないと。」

そう言っただけで近付いてくるジャック、だが、

「なあ、粘土で遊んだ事あるか?」

「へ?」

クウエンサーが突然問いかける、一見意味の無い質問に戸惑うが。

「うん、この前おかあさんが買ってくれたよ!」

「お母さん……?まあいいか、粘土ってのは形を加工するのに適しているんだ。物の隙間に詰めたりも出来るしね。」

「うん……。」

「何を言っているんだこいつは、」

警戒を最大限にする。何を企んでいるかはわからないが動きを見せた瞬間に首を落とすと決意する。

「さっきから投げてた爆弾あるだろ、あれはハンドアックスって言っただけで、粘土と同じ様に加工出来るんだ。つまり……。」

「ツ!!」

察しがついた、ソレをさせる前に殺そうと一步踏み込むが、グジュ!

足下、踏み込んだ場所にあつたレンガが潰れた。まるで粘土を踏み潰したかの様に。

脚を取られ、思わずたたたらを踏む。

クウエンサーの手には、既に起爆用の無線機が握られていた。

「レンガに偽装しておく事も出来る!」

「あつ…。」

スイッチを押し込む。無線機から電波が発せられ、ハンドアックスに差し込まれた信管がその電波を受信、起爆する。

シギシヨアラの街に、三度爆発音が響いた。

爆発はジャツクの足下で起きた。

「やったか…。」

普通であれば、今ので撃破できたかもしれないだろう。だが、現実には非情であつた。

「あはっ、あはははははははッ!!」

粉塵の奥に、ゆらりと人影が立ち上がる。

「おい、冗談だろ…。」

呻く様に呟くクウエンサー。立ち上がったジャツクは全身に傷を負っていたが、何よりも目立つ所が一つ、

右脚が存在していなかった。

その断面は爆発でもぎ取られたのでは無く、鋭利な刃でスツパリと切断されたようになっていた。

恐らく起爆の瞬間、右脚で爆弾を強く踏むことで爆発を抑え込み、それを切断しながら残った左脚で後ろに全力で跳ぶ事で即死を免れたのだろう。

だが、そんな躊躇無く自分の足を斬り捨てる事など出来るのだろうか。

「びっくりした、死んじゃうかと思つたよ。」

「ほら見て、足無くなつちやつた!」

「だから、あなたの右脚をちようだい!」

ジャックが嗤いながら、クウエンサーにナイフを投げつける。だが、クウエンサーはもう避ける事すら出来ない。

覚悟を決め、目を閉じる。

「随分と男前になつてんじゃねーか。」

ふと、幾度も聞いてきた声があった。

ギーン！

投げつけられたナイフがヘイヴィアの軍用ナイフによって弾かれる。

「遅いんだよ……！」

「悪い、向こうで手間取ってた。」

ジャックに銃口を向ける。

「これで二対一だ。どうする、まだ続けるか？」

少しの逡巡、だが、

「うん、おかあさんにも帰ってきなさいっていわれたから、帰るね。」

あっさりと撤退を認めるジャック、霊体化しようとするが、ふと振り返る。

「そういえば、あなたのお名前、なんて言うの？」

「俺か？」

「うん、あなた！」

クウエンサーを指差す。

「クウエンサー・バーボタージユだ。」

「くえんさー、よし、覚えた！また遊ぼうね！」

そう言い残し、去って行く。

暫く警戒を続けるが、本当に撤退して行つたと判断し、力を抜く。

「やっと終わったか、にしてもテメエ、何か懐かれてねえか？」

問いかけるヘイヴィア、だがクウエンサーからの反応が無い。

「おい、どうした？」

「やばい、死ぬ……。」

「あ、忘れてたぜ。」

そう、現在クウエンサーは瀕死の状態、魔力を補給しなくては死にかねないのである。

「おい、無事か!？」

そこへ遅れてセイバーと獅子劫が駆けつける。

「獅子劫、何か魔力を補給出来るようなモノは無いか!？」

「いや、あるにはあるが……。」

「出してくれ、このままだとクウエンサーが死ぬ。こいつが死ぬのは別に構わねえが俺まで消えちまう。」

「わかった、これだ。」

そう言っただけから二つ、握り拳ほどのサイズのモノを取り出す。それは……。

「なあ、それ、心臓に見えるんだが……。」

「ああ、戦闘時に爆弾として使っているヤツだ。魔力は込めてある。」

「それでいい!？」

「いや、よく無いよ!!」

「ちなみに死体から獲ってきたモノだ。」

「その情報は完全に聞きたく無かった!!」

「もういい!セイバー、ソイツ羽交い締めにしてくれ。」

「おう!」

セイバーが後ろから羽交い締めにする。抵抗しようとするが、筋力B+に押さえつけられる。

「ちよつと待て、他に方法は無いのか!」

「無い、諦めて受け入れろ。」

「そんな、獅子劫、助けてくれ!」

獅子劫に助けを求める。だが、獅子劫は煙草を吸いながら、聞こえないふりをしていた。

「なあヘイヴィア、俺たち友達だよな……。」

ゆつくりと口に近付いてくる心臓、クウエンサーはそれを受け入れるしか無い。

「それとこれとは話が別だ。」

「アッー!!」
シギシヨアラに絶叫が響いた……。。

ステータス クウエンサー&ヘイヴィア

【クラス】

アサシン

【出典】

ヘヴィーオブジェクト

【真名】

クウエンサー||バーボタージュ
ヘイヴィア||ウインチエル

【属性】

中立・善

【性別】

男性

【マスター】

???

【ステータス】

筋力 : E

耐久 : D

敏捷 : E

魔力 : E

幸運 : EX

宝具 : A

【クラス別スキル】

気配遮断 : C

自身の気配を消すスキル。隠密行動に適している。完全に気配を断てば発見は難しくなるが、攻撃体勢に移るとランクが大きく下がる。

【固有スキル】

軍隊行動 : C

生前軍に所属していた事により会得したスキル。Cランク相当の「気配遮断」「破壊工作」「単独行動」を得る。



【使用兵装】

ハンドアックス

クウエンサーが軍から支給されていた爆薬。グラム単価はプラチナより高いと言われているが、製造に用いる触媒が高額なのであり、ハンドアックスそのものには換金性はあまり無い。

起爆は粘土状のハンドアックスに電気信管を刺し、無線機で起爆信号を送る事で行う。粘土状であるため隙間に詰めたり形を加工したりと言った事も可能。

正統王国制式採用アサルトライフル

光学スコープや赤外線カメラ、索敵マイクなど各種アタッチメントを取り付け可能。さらに、ヘイヴィアはサイドアームとして50口径の自動拳銃を所持している。

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦Ⅰ

「ランサー、呼び立てて申し訳ありません。」
中央に巨大な玉座のそびえる空間。そこに赤のサーヴァント達は集められていた。

「構わない。いよいよか。」

「はい、直ぐにアサシンも来ます。詳しい事はそれから……。」

「来たよー。」

「つたく、コッチはついさっきまで戦ってたんだけどな。」

そう言つて扉から入ってくるクウエンサーとヘイヴィア。彼らは半日ほど前まで黒のアサシンと戦闘を行っていた。

「到着しましたか、アサシン。」

「ああ、全員集まってるって事はつまり……。」

「貴方には話してありましたか。」

「ともあれ、皆揃うたな。」

コトミネの隣、玉座に座ったキャスターが口を開く。

「準備が整った今こそ、打つて出る時期だ。」

「えー、働きたく無い。」

「ブラック企業かよ此処は。」

茶々を入れるクウエンサーとヘイヴィア、だが……。

「せつかくの聖杯大戦だ、派手に行こうでは無いか。のう?」

「おつとクウエンサー、スルーされたぞ。」

「女王様には下々の言葉なんて聞こえないんだよ、きつと。」

ハッハッハッハ、笑うクウエンサーとヘイヴィア。

ドゴツ!!

クウエンサーとヘイヴィアの間をキャスターの放った魔術による砲撃が通り抜けた。

「……。」

「(…おいヘイヴィア!何も言わずに撃つてきたんだけど!!)」

「(…まずいな、キレさせたか。)」

「(まずいな、じゃねーよ!どうするんだよコレ!)」

「おい、アサシンよ。」

「はいッ!」

思わず姿勢を正すクウエンサーとハイヴィア。

「次は、無いと思え。」

「スイマセンデシタ!」

そして飛び出すは極東の島国に伝わる伝家の宝刀、
DOGENZAであった……。

・

「話は逸れたが、これより黒の陣営に強襲を仕掛ける。」

「わざわざ城を造って、立て籠もる準備を整えたのか?」

ライダーが問いかけるがその疑問も最もだろう。

城とは本来、防衛するものなのだから。

「ライダー、お主は前提が間違っておるぞ。」

「は?そりやどういう事だ?」

「まあ、外を見てくるが良い。」

「あ?」

・

ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン
『虚栄の空中庭園』

赤のキャスター、セミラミスが生前作り上げたと伝えられる空中庭

園

その実態は一言で表せば ” 空中要塞 ” である。

「おいおい、こりや何の冗談だ……。」

思わず目を見開くライダー、その隣ではアーチャーも呆然としてい
る。

何しろ、城が宙に浮き、移動しているのだ。驚くのも無理は無い。
「驚いたであろう。この城は、守るために存在しているのでは無

い。」

「空中要塞、という事か。」

「成る程、こいつで攻め込むって訳だ。」

「大したものだな。」

滅多に感情を表に出さないランサーですら、驚愕を表している。

「この速度であれば、黒の陣営が我々を視認出来る距離まで、そう時間もかからないでしょう。」

「それでは皆さん、戦闘準備を。」

・
・
・

「そういうえばこれ、頼まれていた備品だ。」

「ありがとうございます、アサシン。」

「つたく、サーヴァントをパシリに使うなよ。」

コトミネにビニール袋を手渡すクウエンサー。

その中身は、洗剤や日用品など、黒のアサシンと交戦する前に買っていたものだ。

「サーヴァントと違い、この様なものが必要になるのは生身の辛い所ですね。」

「確かに、この体になってからはあんまり必要としなくなったからな……。」

「そういうえば、貴方の要望もキッチンと取り込んでいたとキャスターが言っていましたよ。後で確認しておいてください。」

「マジか、了解した。」

確認に向かうクウエンサーを眺めながら、ポツリと呟く。

「それにしても、あんな場所とあんなモノ、どう使うのでしょうか？」

ミレニア城塞到着まで、後四時間

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦Ⅱ

始まった。

ミレニア城塞前にて黒陣営と赤陣営が激突する。

赤陣営はホムンクルスとゴーレムの混成編成、対する黒陣営はキャスター、セミラミスの召喚した竜牙兵。

数多の雑兵、その一騎はサーヴァントには遠く及ばない。

あくまで戦争の主役はサーヴァント。黒の七騎と赤の七騎。だが、そんな物、工夫次第でどうにかなる。

生前、クウエンサーとヘイヴィアが何度も行ってきた行為。オブジェクトを何基も破壊した。撃破した。だが、その全てが綱渡り。奇跡を、悪運を積み重ねた結果。

だから、再び同じ事をしろと言われても、する事は不可能に近い。だから、そう、彼等がオブジェクトの天敵である様に、オブジェクトも彼等の天敵であるのだろうか。

つまり、何が言いたいかというと

結局彼等は、オブジェクトと戦う運命なのだろう。

「我が弓と矢を以って太陽神アポロンと月女神アルテミスこの加護を願ひ奉らん。」

凜とした声が響く。赤のアーチャー、アタランテが弓に二本の矢をつがえ、天に向ける。

それは彼女の伝説より昇華されし宝具、矢では無く、天に向け矢を射る事こそが宝具。

「この災厄を捧げん。」

『ボイボス・カタストロフエ
『訴状の矢文』!!』

矢が放たれた。放たれた矢は天へと昇って行き、そして、豪雨の如き矢の雨が降り注いだ。

ホムンクルスもゴーレムも、皆頭上より降り注ぐ矢の雨に貫かれ、命を落としてゆく。

「露払いは終わったぞ。交代だ！ライダー！」

「応!!」

銀色の鎧を纏った美丈夫が立ち上がる。その顔には、隠し切れない喜びが滲み出ている。

空中庭園を飛び出し、空中へ躍り出る。指笛を吹き、呼び出した戦車へと飛び乗る。

「さあ開戦だ！赤のライダー、いざ先陣を切らして頂こう！」

「では、行って来る。」

それを追う様に、アーチャーとランサーが飛び降りる。

「さて、それじゃあ、コツチも予定通りに。」

「上手く行けばドンパチせず済むんだろ。楽じゃねーか。」

ライダー達を見送ったクウエンサーとハイヴィア。彼らはこの空中庭園の進行を妨げる何らかの障害が現れた際に対応する役目を担っているため、未だ空中庭園にて待機していた。

「何も出ないと良いんだが……。」

「大丈夫だろ。サーヴァントが来てもコイツなら防げる。俺らの出る幕は無えよ。」

だが、彼らは運命からは逃げられない。

中央に強大な玉座のそびえる間、そこでクウエンサーとハイヴィアは文字通り”観戦”していた。

「ライダーの野郎、楽しんでやがるなアレ。」

「通った所、轢死体ばかりだね。」

壁に沿って、空中に投影するように戦場の様子が映し出されている。

「アサシン、少しいいですか？」

クウエンサーとハイヴィアの後ろ、玉座の階段に座っていたコトミネが声をかける。

「どうした？深刻そうな顔をして。」

「啓示が降りました。ルーラーが此方に向かって来ます。」

「ルーラーって言うと、この間話してたヤツか……。」

「ええ、必ずや私の願いの障害となる相手です。」

「まさか倒して来いなんて言わないよな……。」

「ええ、それは流石に。此度の聖杯大戦では、彼女もまた啓示に導かれている。ゆえに、互いの啓示をどの様に解釈し、どの様に利するか、それが私と彼女の戦いという事になるでしょう。」

「そうか、ならいいけど。」

そこでふと、先程から一言も話していないハイヴィアに疑問を抱いた。ハイヴィアの方に目を向けると、彼は食い入る様に空中に投影された内の一つ、戦場の全体を俯瞰する様に映したものを見つめていた。

「どうしたハイヴィア、さつきから黙りこくって。」

「なあ、クウエンサー、あれ、おかしくねえか？」

そう言って映像を指差すハイヴィア。暫く眺めたクウエンサーにも、それが分かった。

まず、ゴーレムの数が圧倒的に少ない。

召喚されて暫くした後、クウエンサーとハイヴィアはこのミレニア城塞の偵察に来ていた。その際にはかなりの数のゴーレムを確認出来た上に、そこから時間が立っているため、さらにゴーレムが増えていてもおかしくは無い。

だが、この戦場においてゴーレムは要所にしか配置されておらず、全部で15体もない様に見える。

次に、ミレニア城塞前に、ぽつかりと直径70〜80m程の空間が空いており、ゴーレムもホムンクルスも寄り付かない謎の円形の空間が出来ている。そう、まるで、その空いた空間に何かがあるように。

「何だこれ……。」

「ゴーレムが少なくなったという事は、その分を何かに使った……？」

「何かってなんだよ。」

「それが分からないから考えてるんだよ。お前も考えろリーダー分

析官。」

だが、その直後、疑問は氷解する事となる。

突如、空中庭園が大きく振動した。

まるで砲撃を受けたかのように。

外部の様子を投影していたものも、ノイズが混じり見えなくなる。

「なんだなんだ!」

「まさか、攻撃か?」

「落ち着いて下さい、映像が復活します。」

そしてノイズが晴れ、映像が復活する。そして、

「嘘だろ……。」

「なんでコイツが此処にあるツ!」

ソレを、目撃した。

・
・
・

直径50 m程の球体状の構造物であり、その右側には余りにも強大な砲が接続され、此方を睨んでいる。後部には巨大な構造物が放射状に生えており、球体表面には無数の砲がハリネズミの様に据え付けられている。

材質こそクウエンサー達の知っている様なものでは無く、黒い岩の様なものに見えるが、その表面には無数に枝分かれした青く発光するラインが走っている。

そんなもの、そんな巨大兵器が、
何も無い空間から、ジワリと滲み出す様に現れた。

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦Ⅲ

「あれはゴーレムでしょうか？それにしても大きすぎる様な……」
首を捻るコトミネ、彼の目は先程砲撃を仕掛けて来た謎の物体オブジェクトを捉えていた。

「先程の砲撃から動きが無い……。アサシン達はアレが何か分かりますか？」

「イヤーワカラナイナー」

「そうですか、しかし……」

彼らは現在空中庭園の端に移動し、遥か眼下に存在するそれを観察していた。

考え込むコトミネ、その後ろで、クウエンサーとハイヴィアはコソコソと話し合っていた。

「おいクウエンサー！なんでアレがこの世界に存在するんだよ！」

「知らないよ！まさか、敵のサーヴァントに俺達の世界の人間が……。」

「それは無えよ、俺らの世界にやゴーレムなんて存在し無かっただろ！」

「(それもそうか、そうなるつまり……。)」

「(偶然あの形になったか……。)」

「(此方の世界で造り方を知った、って事か……。)」

「(なあクウエンサー、俺ちよつと心当たりが有るんだが……。)」

「(奇遇だなハイヴィア、俺も少しばかり心当たりが出て来た。)」

「(やっぱ”あの時”だよな……。)」

「(ああ、あの時投げた携帯端末の中身を見られたんだろう……。)」

「(これ、ばれたらマズインじゃねえか?)」

「(ああ、ばれる前にどうにかしなきゃ……。)」

「(特にキャスターにばれたらヤバイぞ、果たして何をされるが……。)」

「(ああ、キャスターには絶対にばれちゃいけない、絶対にだ!)」

思いを一つにするクウエンサーとヘイヴィア、だが、現実はそう甘くは無い。

「(さて、じゃあどうキャスターを誤魔化すかを……。」

「我がどうした。」

ピシツ、と空気の凍る音が響いた。

恐る恐る振り向くクウエンサーとヘイヴィア、そこにはやはり、

「いたのか、キャスター……。」

「まさか、今の話……。」

「ああ、聞いていた。」

「ちなみに、何処から……?」

「最初からだ。」

それは事実上の処刑宣言。まさしく蛇に睨まれた蛙のようになるクウエンサーとヘイヴィア。

「さて、詳しく説明して貰おうか。」

「あつ、ハイ……。」

・
・
・

かくかくしかじか

「つまり、だ。」

コメカミに手をやり、心底呆れた様に溜息を吐くキャスター。

「汝らの落とした携帯端末を拾われ。」

「ハイ。」

「そこに入っていた設計図を見られ。」

「ハイ。」

「アレが造られた。という訳か。」

「ハイ。」

「阿呆か貴様らは。」

「返す言葉もございません。」

「まあキャスター、その辺りで……。」

キャスターを宥めるコトミネ。その間クウエンサーとヘイヴィアは地面の上に直接正座をさせられていた。

生前にも上官であるフローレイティアに正座をさせられていたが、あの時は床、今回は地面に直接である。

「(ヤバイ痺れてきた……。)」

「(我慢しろクウエンサー！ 此処で動いたらまた何か言われるぞ！)」

「(そうは言っても……。)」

「おい、聞いておるのか？」

「ハイ！ 大丈夫です！」

「……、まあ良い。しかし、此方の魔力から言つてあの砲撃を余裕を持って防げるのも後十回程度だろう。そこでだ。」

「(おいヘイヴィア！ 何か嫌な予感がするんだが……。)」

「(奇遇だなクウエンサー。俺もだよ！)」

遙か下にあるオブジェクトを指差すキャスター。

「アレ、貴様らが破壊して来るがよい。」

「いやいやいや、アレの相手はキツイと思うんだが。」

「何故だ？ 生前何度も破壊したのであろう？」

「いやまあ、そうだけだな……。」

「ほら、それに俺達は今宝具を使えないだろ。」

「アレが終わってませんからね。急いで終わらせませす。」

苦笑いしながらコトミネが言う。

「いいから行つて来るがよい。倒して来るまで帰つて来てはならぬぞ。」

そうキャスターは言うと、クウエンサーとヘイヴィアを蹴り飛ばす。

「「え？」」

そしてそのまま落ちて行くクウエンサーとヘイヴィア。普通であればキャスターに蹴られた程度で落ちる様な事は無かつただろう。

だが彼らは正座で空中庭園の縁に座っていた。そこを上半身を押

す様に蹴られたのだ。

突然の事に抵抗する間も無く、クウエンサーとヘイヴィアは真つ逆さまに落ちてゆく。

「あの女巫山戯んなコノヤロー!!」

「叫んでる場合か!このままでと地面に激突するぞ!!」

「畜生、何時もこんな役回りばかりだ!!」

「いいから黙ってる!舌噛むぞ!」

何秒経つただろうか。クウエンサーとヘイヴィアが地面に”着弾”した。

余りの衝撃に悶えるクウエンサーとヘイヴィア。

「ゲホッ!痛ってえ……。」

「全くだ。生身だったら死んでたぞ!」

「つたく、にしても何処に落ちた?」

辺りを見回すヘイヴィア。だが着弾の衝撃で上がった土煙によって視界が障害されている。

「周りが見えない。爆風で土煙を吹き飛ばすか?」

「辞めておけ、此処は敵地のど真ん中だ。んな事したら直ぐに包囲される。」

「そうか……。」

そして土煙が晴れ、見通しが良くなる。

現在位置の約500メートル程後ろには黒の陣営の本拠地、ミレニア城塞が。そして、

目の前にはオブジェクトが存在していた

ゾツ!!

背筋が凍る。約5メートル先、オブジェクトが此方を向いていた。

「(なんて所に落としてくれやがったあの女!!)」

クウエンサー&ヘイヴィア対オブジェクト、生前を再現したかの様なその戦いは、絶体絶命の状況から始まった。

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦Ⅳ

オブジェクトとの距離5メートル。

主砲、副砲を使うまでも無いこの距離で、オブジェクトの取った行動は単純。

その重量で敵を轢き殺す

ゴウン、と脚部の車輪が回転し始める。

その回転数は急激に増し、3 m程の間に時速100 kmを叩き出す。

そして、クウエンサーとハイヴィアのいた場所を通過し、振り向いて跡形も無い事を確認した後、そのままミレニア城塞の方向へと向かって行く。

その車輪に轢かれたモノは、原型もわからない程細切れにされているだろう。

轢かれていれば、の話だが。

・
・
・

「クウエンサー、生きてるか？」

「ああ、何とかな……。だけど背中が死ぬ程痛い」

「俺もだよ。コノヤロウ」

「オブジェクトは行ったみたいだな……」

「そりゃあ良かった。このままコンビニに行って時間潰してから帰ろうぜ」

「そうしたいけど、多分キャスターに俺達が潰されるよ」

「だよなー。あの女敵前逃亡とか許してくれなさそうだもんなー」

「多分フロレーティアさんも許してくれなかったけど……」

地面に寝転びながら話すクウエンサーとハイヴィア。彼らは落下した地点から50 mほど離れた場所に吹き飛ばされていた。

「にしてもハイヴィア、一歩間違えば死んでたよアレ。」

「仕方ねえだろ。アレしか思い付かなかったんだよ。」

彼らがオブジェクトを躲した方法、それは敵が0・5世代をモデルにしていなければ絶対に行えなかった方法。

その場に伏せる。ただそれだけである。

仮にベイビーマグナムと同じ静電気式推進機構やウイングバランサーの用いるエアクッション式推進機構では、下に潜り込んだだけで莫大な電圧によって弾け飛ぶか、エアクッションの巻き起こす風によってズタズタに引き裂かれるだろう。

だが0・5世代をモデルとして造られたこのオブジェクトには、元と同じ設地重量分散式の車輪が使われている。

そして、このオブジェクトはその車輪の集まったブロックを四つ並べた上に球体に乗ったような形をしている。

つまり、そのブロックとブロックの間にスペースが空いており、そこに自分の身体が収まるように身を伏れば轆かれることは無い。

だが、巨大な物体が高速で動く際に起こされる風圧により、オブジェクトをやり過ぎしたクウエンサーとヘイヴィアは吹き飛ばされた。

そのまま40m程飛んでから地面を転がり、地面の窪みに偶然嵌った事で、オブジェクトの眼を免れたのだ。

「見え無くなっただけで誤魔化せたという事は熱源や魔力を感知してらって事じゃ無い……」

「そうなると0・5世代と同じか？」

「ああ、恐らく光学センサー、カメラを使っているんだろう」

「そんな所まで0・5世代と同じなのかよ……」

「つまりあの時と同じだ。服に泥付けて行こうぜ」

そう言いながら服に泥を塗りつけていく。

「さて、これからどうするんだ？キヤスターの話だと後十回ぐらいしか耐えられないんだろ？」

「でも俺達にはヤツに関する情報が足りない」

「0・5世代と同じじゃ無いのか？」

「主砲の形が違った。それに装甲の材質も既存の物と違う」

「じゃあどうするんだよ」

「調べよう。ヤツに関する情報を集めるんだよ」

「どうやってだ？まさか潜入する訳じゃ無いよな……」

「ああ、そんなことはしない」

上を指差すクウエンサー。その指差す先は、彼らが先程までいた空中庭園。

「あそこで暇してる女帝様に手伝ってもらおうぜ」

「この赤い所を押せばよいのか？」

「違うそこ押すと電源が切れる！その隣だ！」

「ええい紛らわしい！これでよいか？」

「それでいい。聞こえているか？」

クウエンサーは現在無線で通信をしていた。通信相手は空中庭園にいるキャスターである。

「ああ、先程よりもハッキリと聞こえておる。それで何をすればよいのだ？」

「ああ、今敵のオブジェクトがミレニア城塞に引っ込んでいる。上から撮った映像をハイヴィアの携帯端末に送ってくれ」

「わかった。こうするのだったな……」

カチャカチャと何かを操作する音が無線から聞こえてくるが……。

「なあ、アサシンよ」

「どうした？何か異常でも起きたか？」

「いや、何もしていないのに壊れたのだが……」

「コトミネに代わってくれ」

「はい、送信していますが、届きましたか？」

「ハイヴィア、届いているか？」

「ああ、大丈夫だ。これで見れる。」

「助かった、ありがとうコトミネ。」

「いえ、頑張っ来て下さい。」

そう言っ通信が切られる。

キヤスターが後ろで「機械じゃなければ…。」と呟いていたのは聞か
なかつた事にした方が良いのだろう。

「さて、どうなってやがる？」

クウエンサーとヘイヴィアが携帯端末を覗き込む。そこにはハッ
キリとオブジェクトやその周辺が俯瞰で映されていた。

「さて、何か見つかるといいんだが……。」

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦Ⅴ

「見ろよハイヴィア。細部までハッキリと見えるぜ」

「ああ、それに奴ら、俺らが覗いてるって事に気づいてない」

「まったく、これだから覗きはやめられねえ！」

「全くだ！」

「……。」

「……。」

「やめよう、無理にテンション上げてても虚しいだけだ」

「そうだな……」

クウエンサーとハイヴィアは現在、敵オブジェクトの弱点を探るため、空中要塞から中継された映像を確認していた。

「さてと、それでこれからどうするんだ？」

「さつきから気になっている事が二つある。一つは敵の装甲だ」

「さつきテメエが言ってたヤツか。既存の物と違うだとか」

「ああ、どんな材質で出来ているのか、俺達の持っている中で最高の火力、お前の携行型対戦車ミサイルで抜けるのかといった所だな」

「そうかよ、それで二つ目は？」

「主砲についてだ。連続射撃できるのか、装填数はどのくらいなのかとか、そんな感じかな」

「その事で、少し気になった事があるんだが……」

「何だ？」

「何でヤツは一発撃っただけで引っ込んで行っただんだ？」

「言われてみれば、対策をされる前にそのまま撃ち続ければ勝てたかもしれない。ならば何で……」

「まさか一発しか装填できないってことは無いだろうな」

「そんなわけないだろ、これ見ろ」

そう言っただけで端末を示すクウエンサー。その画面には、オブジェクトを俯瞰している映像が映っているが、

「何かでかいモン積んでいるな、何だこれ？」

「多分主砲の弾薬だと思う」

「はあ？ 大きすぎるだろ。目測で5メートル近くあるぞ！」

「それが5発だな、一回の補給で5発か……」

「じゃあさつきは何で一発しか撃たなかったんだよ、何発も装填できらならそんだけ撃てば良かったじゃねえか」

「多分、だけど」

そう前置きするクウエンサー。

「試し撃ちだったんだと思う」

「試し撃ち？」

「ああ、俺達はこの城塞に強襲しに来ている訳だからな。主砲のテストも終わっていない機体を出したのかもしれない」

「そういう事かよ……」

「もしかしたら機体自体も急いで組み上げたのかもしれない。それならば何処かに不具合が生じる可能性も……」

「そうだったら良いんだがな、そんなに上手く行くもんじゃないだろ」

「ああ、分かっている」

「つまりだクウエンサー、結論を言え」

「現在装填された分まではまだ耐えられるけど、その次、もう一度装填されて撃たれたら……」

「それまでに倒さなければコツチが落とされる、って事か」

「ああ、それまでにどうにかしてヤツを倒さなければいけない」

「まったく、給料も出ないのによ……」

「つておい！ 画面見ろ！」

そう叫ぶヘイヴィア。そこにはゆつくりと動き出すオブジェクトが映されていた。

「動き出したか……」

「此処からどうするんだ？ いくら天才のヘイヴィア様でも直ぐにはアイディアは出ねえぞ」

「ああ、気になっている事のもう一つを調べようと思う。」

「もう一つ、つてのは装甲の事だったか？」

「ああ、材質とか強度とか、その辺りだな」

「どうやって調べるんだそんな物、オブジェクトにクライミングでもする気か？」

「そんな事自殺行為でしか無いだろ。それにオブジェクトに登るのはもう懲り懲りだ。それよりも楽に分かる場所がある」

「まさか……！」

「ああ、オブジェクトに弾薬を装填していた所、ミレニア城塞の内部。そこに恐らく換えの装甲とかが有るはずだ」

「敵地のど真ん中じゃねえか……」

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦VI

「おい、ハイヴィア」

さて、潜入すると決めたはいいが、潜入するにも準備が必要だ。

「おい、聞こえてるだろ！」

例えば、目立たぬようにその場所に合った衣服に変装するなどが挙げられる。

そのためにクウエンサーとハイヴィアは、殴って気絶させたホムンクルスから奪った衣服を着用しているのだが……。

「おい！」

「どーしたクウエンサー、そんなに声を荒げて」

「何で俺だけ女装なんだ!？」

そう、ユグドミレニアのホムンクルス用礼装(女性用)なのであるツ!

「仕方が無いだろ。折角気絶させて奪ったんだ。使わねえともつたいない」

「納得できるか! 伝説の看板娘クウエン子ちゃんはもう封印したと言っただろ……」

「安心しろ。似合ってるぞ」

「デメエ……!」

そんな会話が有りつつも、アサシンとしての能力を遺憾無く発揮してミレニア城塞に潜入して行くクウエンサーとハイヴィア。

そして、

「ここだよな……」

「ああ、さっきの映像とも一致する。此処で間違いないはずだ」
先程の映像と一致する空間を発見した。しかし、

「チツ、割と人が残ってやがる」

「6人か。ハイヴィア、無力化できるか?」

「舐めてんのか。10秒で終わらせる」

取り回しを重視したためか、ライフルではなく拳銃を取り出すハイヴィア。

「テメエは片付けを頼む。そのくらいは働けよ」

「はいはい」

銃口に消音器をねじ込み、ナイフを腰に装着する。

敵の位置を確認し、

「行くぞ」

内部へと躍り出る。

照準を手近に居るホムンクルスの頭部に合わせ、

パン

消音器サブレッサーにより減衰された銃声が響き、額を撃ち抜かれたホムンクルスが糸が切れた様に地面へと倒れる。

そのまま2人目、3人目と撃ち殺した所で離れた位置にいた残り3人が此方へ気付くが、

「遅えー！」

その中で最も近くにいた敵の首をナイフで掻き切る。

残り2人。

立てかけてあったハルバードを取ろうとした敵にナイフを投擲する。

回転しながら飛ぶナイフは、まるで斧のように敵の側頭部を叩き割った。

悲鳴すら上げず、そのまま真横に薙ぎ倒される。

残り1人。

「敵しッ」

増援を呼ぼうと声を上げる最後の1人の首を掴み、壁に叩きつける。

首を締め上げながら壁に押し付け、

ゴキッ

首の骨を折る。事切れたホムンクルスは、ドチャリと地面に崩れ落ちた。

「終わったぞ」

「片手で首の骨折るとかバケモノかよ……」

ハイヴィアが作った死体を一箇所にまとめながらそう漏らすク

ウエンサー。

「サーヴァントになったせいで多少は強化されてんだろ」

そう言いながら、首を折った最後の1人を引きづり、死体の山に追加する。

そこに落ちていたシートを被せ、死体を見つかりにくくする。

「こんなもんか。」

「良いんじゃないか。細かい所まで気にしたらキリが無え」

死体の偽装を切り上げ、本来の目的を再確認する。

「まずはヤツの装甲を調べたいと思う。オブジェクトの装甲は一部を除いて高耐火反応剤を混ぜた鋼を何百、何千と重ね合わせたオニオン装甲でできている」

「流石にそれは整備兵じゃ無くても知っているな」

「だけど、あのオブジェクトの装甲は一見、磨いた石の様な質感だった」

「それが何なのか調べるわけか」

「ああ、まずはそれを探さなきゃな。予備か換えの装甲でも置いてあると良いんだが……」

「あれじゃ無えか？」

そう言つて奥を指差すハイヴィア。その視線の先を辿ると。

「本当だ、大量に積まれている……」

「とつとと確認しようぜ。いつ敵が来るかもわからないからな」
駆け寄り、しげしげと観察する。

「この手触りは、やっぱり金属じゃ無いな」

「つまりだ、ヤツの装甲は脆いのか？」

「この材質が岩石を加工したものだったらな。だけど妙だ、あのオブジェクトは防御を捨てているのか？」

「試して見ればいいじゃないか」

「それもそうだな。それが一番手っ取り早い」

近くにあった機材を利用し、積まれた装甲のうち一枚を壁に立てかける。

「ハイヴィア、コレに対戦車ミサイルを撃つてみてくれ」

「了解だ。だが、爆発音を立てれば敵がわんさか来るぞ」

「分かっている。だから結果をカメラに録画して後で解析する。お前が撃ったら敵が来る前に逃げるぞ」

「分かった。いつでも撃てる」

「取り出した携行型対戦車ミサイルを構えるハイヴィア。」

「撃つてくれ」

携帯端末のカメラを起動したクウエンサーが発射を指示し、

「ッー！」

引き金が引かれ、弾体が発射される。

煙の尾を引いて飛翔する弾体は命中と同時に成形炸薬弾頭の効果によりメタルジェットを生み出し、装甲を穿つ、

だが……。

「命中、したが……」

「マジかよ……」

装甲は、表面に微かな焦げ目がついているものの、成形炸薬弾頭による貫通効果など効かなかったかのようになり、穴の一つも空いていなかった。

「つて、惚けてる場合じゃねえ！とつとと逃げるぞ！」

「今の音に気付いたヤツはかなりいるはずだ。無事に脱出出来るといいけど……」

脱出のため走り出すクウエンサーとハイヴィア。だが、

カツン

「これ、足音か？」

カツン

「もう来たのか。」

カツン

「この足音、ホムンクルス達の履いていたブーツじゃ無い……？」

カツン

「まさか……」

そして、クウエンサー達が入ってきた所から、スツ、と1人の男が入ってくる。

カツンツ!

その男は、マントを羽織り、無貌の仮面を着用した怪人だった。

「僕の知らない間にネズミが入り込んでいるとは、参ったな。」

「テメエは……。」

「僕かい？僕は。」

「黒のキャスター、君達の敵だ。」

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦Ⅶ

さて、突然だがここでクウエンサーの格好を思い出して欲しい。
そう、クウエンサーは現在女装している。女装工兵クウエン子ちゃんになってしまっているのだ。

だからこそ、この様な悲しい勘違いが起きてしまうのも仕方ない事だろう。

「赤のアサシン、君達の事はランサーから聞いているよ」

「ランサー…、あの時のヒゲか…」

「ああ、偵察の時の……」

そう言われて思い返すのは召喚されてからの初戦。ゴーレムに追われてサーヴァントにも追われたあの戦闘だ。

「彼からは君達を発見したら殺さずに連れて来いと言われている。おそらく自分の手で殺串刺ししたいのだろう。そこまで怒らせるとは、君達は一体何をしたんだい？」

「何って、そりあ……」

そう言われて思い返す。

- ・ 携帯端末を顔面に投げつける
- ・ 足を引つ掛けて転ばせる
- ・ フラツシユバンを投げつける
- ・ 目つぶし

「そりゃ怒るわ。」

「だな、こんな事されたら誰だってキレル。」

「それにアレに殺されるって事は串刺しだろ。嫌にも程があるよ
！」

「知ってるかクウエンサー…、串刺しってケツの穴から刺していくらしいぞ」

「うわあ聞いているだけでぞわぞわしてきたツ!!」

ぞわぞわぞわぞわーッ!!と悪寒に震えるクウエンサー。

「でもなんでそんな事知ってるんだ?」

「俺の婚約者の家系が昔な……」

「ああ、あの子の……」

納得するクウエンサー。貴族の家系というのは総じて闇が深いものなのだ。

「それにしてもだ、情報の伝達はしっかりして欲しいものだ。」

突然、黒のキャスターがポツリと愚痴を漏らす。

「ランサーは赤のアサシンは男の2人組と言っていたが、どう見てもそちらの金髪の方は女じゃないか。」

「ん？」

そう、クウエンサーは現在女装している。つまり……。

「彼も一国の城主であるなら情報の正確性の価値がわかっているだろうに……」

「こいつ、俺クウエンサーを女だと勘違いしてやがる！」

「フフフフフフフツ……！」

「おいハイヴィア、笑うな」

「いや、けどな、フフツ……」

「おい。」

「フフフフフうごっ！」

半ばキレかけたクウエンサーが拳をハイヴィアのみぞおちに突き込む。

いくら訓練された軍人だとしても、みぞおちを殴られれば呼吸が詰まる。

その様子に気付いたキャスターが問いかける。

「もしかして、男なのか……？」

「ああそうだよ男だよ！」

「いや、その見た目で男……？」

「デメエ……！」

「クウエンサー、ぶっちゃけ俺からも女にしか見えない」

「ファツ○ク!!」

崩れ落ちるクウエンサー。彼の女装は、余りにも似合いすぎている。

盛大に気が抜けてしまったが、ここは敵の本拠地、ミレニア城塞である。

そして敵の陣営のサーヴァントと対峙したならば、取るべき行動は一つだろう。

「どうした?」

「いや……、全然そんな空気じゃないなと思って……」

クウエンサーが男だと発覚してから五分、彼らはまだ睨み合いを続けていた。

いや、睨み合いと言うには語弊があるだろうか。

「ところで、この配線構造、コレには一体どんな目的が?」

「ああ、それはだな……。」

「なんで和気あいあいと話し合ってるんだテメエらは!?!」

「いや、だって自分の知らない技術技術者を持った人間技術者がいるんだぞ、語り合いたいと思うのは仕方ないだろ!」

「そうだぞ、赤のアサシン」

「そうだぞ、じゃねえよ……。」

頭を抱えるヘイヴィア。普段からクウエンサーの行動に悩まされる事が多々あるが、今回は特に酷い。

「それにだヘイヴィア、話の合間にこっそりとあのオブジェクトの情報を聞き出す作戦なんだ、黙って見ていてくれ。」

「少なくともソレを敵の目の前で言っちゃダメだと思っぜ。」

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦V I I I

「キャスト、ここは？」

「ああ、そこはだね…」

「(こいつらほつといたらいつまで喋りつづけるんだ…?)」

クウエンサーと黒のキャストが情報を聞き出すという名目で話し始めてからいくら経つが、技術者同士の話の種は中々尽きず、すでに隣で聞いているだけのヘイヴィアは飽き始めていた。

「(にしてもこいつらよくそこまで話が continua…)」

そう思い、熱く語り合う2人を尻目に携帯端末を弄り出すヘイヴィア。

「(しかしまあ…)」

ヘイヴィアとて隙を突いてキャストを殺すつもりで、銃のセーフティーは解除してある。直ぐに拳銃を抜いて、キャストの額に穴を開けられるだろう。だが…

「(思ったよりも隙が無え…)」

キャストは先程から此方に目を向けていない、だが非常に警戒している。現にこうしてクウエンサーと話している間も必ずヘイヴィアとの間にクウエンサーを挟む位置に移動している。

そしてそれはクウエンサーも同様で、キャストからは見えない位置に信管を刺したハンドアックスを隠し持っている。だがキャストも直ぐにゴーレムを呼び出し反撃できる様に準備している事だろう。

やろうと思えば殺せる、だが此方も反撃され痛手を負うだろう。下手をすればこちらも倒される。そしてそれは向こうも同じ、三人は膠着状態に陥っていた。

その均衡を破ったのは小さな電子音だった。

その音はクウエンサーの持つ無線機から聞こえていた。

ちらり、とキャストの様子を伺う。

「おや、返答しないのかい？」

「じゃあ、失礼して。」

そう言つて会話がキャスターに聞こえないようイヤホンを着け、鳴り続ける無線に応答する。

「はい、こちらクウエンサー。」

『アサシンですか。ひとまず貴方達の分の令呪の移植は完了しました。』

「コトミネか、何で俺達の方だけ先に？」

『だって貴方達弱いじゃないですか。相性の悪い相手と当たったらすぐ死ぬでしょう。』

「事実だけに反論できない……ッ」

『では、令呪が必要になつたら連絡してください。』

そう言つて通信が切断される。

「(どうだったクウエンサー?)」

「(取り敢えず令呪は使えるようにしてくれたらしい)」

「(そうか、じゃあいい加減脱出しねえか?これ以上ここでヤツと話していても有用な情報が入るとは思えねえ)」

「(同感だ。あいつ全くボロを出さないからな……)」

「終わったかい？」

「ああ。それで、これからどうする?」

「それなんだが……」

キャスターが手を掲げる。その瞬間、

「クウエンサー!!」

咄嗟に転がる。頭上から落下してきた何かの直撃は避けたが、衝撃で吹き飛ばされ、さらに砕けた地面が腹にめり込む。

「カハッ……」

「何だ!何が降つてきやがった!?!」

土煙がおさまり、落下物の全容が明らかになる。それは……

「「ゴーレム!?!」」

「すまないね、赤のアサシン。」

「何すんだテメエ、死ぬとこだったじゃねえか!」

「殺すつもりは無かった。だが……」

黒のキャスターが歩み寄ってくる。その足跡を辿るように地面が

盛り上がり、何機ものゴーレムが造られていく。

「マスターに呼ばれてしまつてね、すまないが帰ってくるまでおとなしく捕まっついていてくれないか？」

そして、手が振り下ろされた。

キヤスターによつてゴーレムが解き放たれた時、クウエンサー達に取れた手は一つ、すなわち

「逃げるぞヘイヴィア!!」

「おうよー」

逃走である。

とはいえただでさえ広いミレニア城塞、さらに内部は魔術によつて空間を広くする工夫もされているのだろう。

そんなこんなで廊下を爆走するクウエンサーとヘイヴィア、後ろを振り向けばゴーレムだけでなくホムンクルスまでもが追いかけてきている。

クウエンサー達もただ逃げていた訳ではない。廊下の角などにハンドアックスでトラップを仕掛け、ゴーレムと違い銃弾の通るホムンクルスを撃つて数を減らしていた。だが…

「くそッ！また補充だ！」

廊下の分岐地点から、部屋の扉からわらわらとホムンクルスが出現する。

実際、ホムンクルス自体にそれほど脅威があるわけではない。だが、その数でゴーレムを破壊するために仕掛けたトラップを強引に破壊していく。自分の身を犠牲にして。

そしてその間にも、ゴーレムは少しづつ迫ってくる。

「おい！このままじゃゴーレムに追いつかれるぞ！」

「仕方ない、宝具を使うか……。」

「いいじゃねえか！何ならこの城倒壊させちまおうぜ！」

「それで行こう！」

そう言っただけで急停止するクウエンサーとハイヴィア、後ろから迫ってくるゴーレムやホムンクルス達に銃と起爆装置を突きつけ、

「ちよつと待つてハイヴィア。」

「あん？何か問題でも起きたか？」

「いや、俺達の宝具つてめっちゃくちや魔力の消費が多いから使うなって言われてなかったっけ？」

「そういやそんな事女帝サマに言われた様な記憶が……」

後ろを振り向く、ゴーレムとホムンクルスが廊下いっぱい押し寄せてきていた。

踵を返して再び走り出す。

「どうする……？」

「どうしよう……？」

「このハイヴィアの考えなし！」

「うるせー！頭使うのはテメエの仕事だろ！」

「天才イケメン貴族を自称してやがったのは何処のどいつだ！」

「自称じゃないですー、本物の貴族様ですー。」

「つてそんな事言ってる場合じゃねえ！」

「とりあえずコトミネに頼んで令呪をつかってもらおう！」

そう言っただけで懐から無線機を取り出してコトミネに繋ぐ。

「頼む、出てくれッ……」

何秒かの呼び出しの後、スピーカー部からコトミネの声が聞こえてきた。

「はい、こちらコトミネ。」

「コトミネ、宝具を使いたい、令呪を使用してくれ！」

「何ですか聞き取れなかったのもう一回お願いします!!」

よく聞けばスピーカー部からは金属同士がぶつかり合う音やス

パーク音、低い唸り声などが聞こえていた。

「コトミネー！ギブミー令呪ウウウ！！」

「今！戦闘中ですので！後にしてください！」
ブツツ…

「…」

「…」

「「コトミネエーツ！」」

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦ⅠⅩ

「見つけたか!？」

「いえ！居ません！」

「何処へ行った?! 探し出せ!!」

数人分の足音が遠くなっていく。

「(…行つたか?)」

「(…ああ、もう大丈夫だ…多分)」

机の陰からクウエンサーとハイヴィアが這い出してくる。

クウエンサーとハイヴィアは、逃げる途中にあつた部屋に侵入する事で追跡を振り切っていた。

「美女のネーチャンに追つかけられるならともかく、あんな武器抱えた男に追いかけても何も嬉しくねえよ…」

ハイヴィアは足元に転がったモノを小突きながら、無線を弄るクウエンサーを睨みつける。

「テメエが赤のキャスターと和氣藹々としてるからこんな事になつたんだぜ、下手したらとっ捕まつてたぞ」

「しようがないだろ、あのオブジェクトの情報を得るためには必要な事だつたんだ。それに有意義な話もできたし…」

「最後が本音だろ、それで、無線は通じたのか？」

「駄目だ、合コンで連絡先を交換した女の子みたいに音沙汰が無い」

「テメエじや合コンに行つた所でドン引きされるのがオチだろ」

「そういうお前はどうかんだよハイヴィア」

「貴族”は見合いはしても集団で合コンする事なんて無いからな」

「あれ、でもお前婚約者が…」

「ああ、だから全部形式的なモンだった。それより、コレをどうするか…」

「できればコトミネか女帝様に指示を仰ぎたかつたけど…」

ちらりと床に伸びているモノを横目で見て、クウエンサーは言う。

「本当にどうしよう、コレ…」

恰幅の良い体に金髪、左手には掠れて既に痕跡となった令呪。

ユグドミレニア黒のセイバー、その元マスタ―

ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアが

血溜まりに倒れこんでいた。

・
・
・
・

話は数分前に遡る。

「(おい、行ったか…?)」

「(まだうろついている…)」

ユグドミレニアのホムンクルス達に追いかけられていたクウエンサーとヘイヴィアは現在、偶然落ちていたスパイの必需品、ダンボールによって廊下の隅に身を隠していた。

流石は島国のゲームに登場する蛇も愛用したと言うアイテム、その効果は絶大であり、隠れながら移動しても気付かれる事は無かった。

流石に気付くだろうとは言ってはいけない、古来よりダンボールとはそのような物なのだ。

「(にしてもこのダンボール箱、中身はパソコンだったみたいだな…)」

「(パソコン? 魔術師ってのは科学的なモンを嫌うんじゃないのか?)」

「(そう聞いたけどな、例外もいるって事だろ)」
そんな事を話している間に、周囲のホムンクルス達は別の場所を探しに行ったのか、見当たらなくなっていた。

のそり、とダンボール箱の下から這い出す二人。

「さて、こっからどうするよ相棒」

「そうだな、ひとまずは…」

先程見た光景を思い出す。

「あのオブジェクトに使われていた装甲板、あれが何なのかを探ろう

か」

「アテはあんのかよアテは、まさか今からまた仮面野郎の所に戻ると言うんじゃないだろうな」

「それだけは勘弁願いたいな、さつきヤツと話していて分かった事がある」

「なんだよ、ヤツの好物でも教えてもらったのか？」

「あの妙な装甲は錬金術を応用して作られたらしい」

「錬金術か…、確かコトミネから渡された資料に書いてあったな」

「ああ、敵のマスターの一人が錬金術師だ」

「名前は確か…」

「ゴルドだ、ゴルド・ムジーク・ユグドミレニア。」

「そうそうそんな名前だ、ひとまずソイツを探すってことか」

「そこからあのデカブツを切り崩すヒントを探していこう。しかしどうやって探すか…」

「仮にもマスターだ、軍隊で言えば指揮官みたいなもんだろ。なら他のやつに比べていい部屋を与えられているんじゃないか？」

「そのセンで探してみるか…」

やることが決まれば行動が早いのがバカの特徴である。

隠れながら人の気配のする部屋を探り、それらしい部屋を一つずつ潰していく。

そして…

「おい…！なんだ貴様ら…」

「クウエンサー、こいつが？」

「ああ、こいつのはずだけど…」

椅子にもたれたままなにやら喚いている男に目を向ける。明らかに顔が上気しており、呂律も回っていない。これは…

「酔っぱらってる？」

「おいクウエンサー、ホントにこいつが目的のゴルドなのかよ。本国の居酒屋にこんな腐る程いたぞ。」

「私を誰だと思っている！ムジーク家当主、ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアだぞ！」

「ほら、本人もそう言ってるし」

「まじかよ…、こんなのが黒のセイバーのマスターかよ…」

ふと、興奮で赤くなっていた顔がふつと暗くなる。

「もう私はマスターではない…」

「なんだって？」

「もうマスターではないと言ったのだ！」

興奮して思わず立ち上がるゴールドだが、その拍子に転がっていたワイン瓶を踏みつける。

そのまま足を滑らせ、

ゴツ!!

「うっわ…。机の角にモロに行きやがった」

「血が噴水みたいになってる、これほつといたら死ぬんじゃないか？」

「そうだな、手間が省けた」

「……」

「……」

「って殺しちや駄目だ！情報吐かせないと！」

「今の音で位置がばれたかもしれないねえ！おいクウエンサー！一旦机の陰に隠れるぞ！ソイツも引きずり込め！」

「止血は?!」

「机の陰でやればいい！」

「了解！ってこいつ重っ！」

「何やってんだ貸せ！」

・
・
・
・
・

「それにしても割とあっさり吐いてくれたな、もう少し粘ると思った

んだが」

「拷問紛いの事をされそうになったんだ、素人なら喋るよ」

「本題に入ろうクウエンサー、さっきの情報からヤツを倒す方法は思いついたのか？もう時間も無いんだ、まさかこれまでの時間が無駄になっただけとかは辞めてくれよ」

「大丈夫だハイヴィア、可能性は出来た。後は命を張るだけだ」

「さあ、あのクソ忌々しいオブジェクトを壊しに行こう」

踊る阿呆と撃つ阿呆 ミレニア城塞強襲戦X

と、いうことで

「スコップは持ったなヘイヴィア!!」

「応よ!! 散々あの爆乳上官に掘らされたんだ、俺達のスコップ捌きを見せてやる……!!」

土木工事再びである。

・
・
・
・

黒のセイバーの元マスターである男と穩便に”お話”した後、クウエンサーとヘイヴィアは城塞の庭からスコップを盗み出して戦場から1km程離れた地点で穴を掘っていた。

「にしてもこんな思いっきり体晒してて大丈夫なのかよ、敵のアーチャーに頭抜かれでもしたら笑い事じゃすまねえぞ」

「アーチャーがテスト勉強中に部屋の隅のホコリがどうしても気になるタイプならともかく、今はこっちのサーヴァントも暴れてるんだ、こっちに構う余裕が無いことを祈ろう」

「結局神頼みかよ、信心組織じみてやがる……」

えっさほいさと掘り進める二人、しかし単純作業はつい無駄話が進むものでもあり

「なあ……、俺達働かされすぎじゃないか?」

「確かに……、昨日黒のアサシンと戦わされてロクに休む間もなく今度はオブジェクトだ。このヘイヴィア様を顎で使いやがってDSめ……」

「こっちなんて片足持つてかれたあげく心臓食わされたんだぞ。カニバリズムの趣味は無いのに」

クウエンサーはうえっぷ、吐きそうと青い顔で口を押さえる。

「それが無けりやあそこで死んでただろ、セイバーのマスターに感謝しておけよ…あれ？」

「どうしたヘイヴイア、女帝サマにいいイタズラでも思いついたの？」

「イイ感じに赤っ恥かかせる方法があればいいんだがな。って違う、クウエンサー、お前黒のアサシンの見た目覚えてるか？」

「そんなの殺されかけたんだから当然…あれ？」

「というか真名まで自分でバラしてた気がするのに全然思い出せねえ…」

「なんだろう、喉元まで出かかっているのに出てこないこの感じ…」

「流石に二人まとめて記憶障害とかはないだろうな。」

散々殺し相手の見た目どころか名前、獲物まで思い出せなくなっているのは異様でしかない。

「となると宝具かスキルか…」

「だろうな。ただ…」

「ああ…」

確証は無い、だが己の魂がそう言っている。

「ロリっ娘だった気がする…!!」

・
・
・
・

「仕掛けも終わったところで言うのも何だが、本当にこの地点で合ってるのかよ。そもそもそれだって割と眉唾物だって聞くが」

「俺の所属してた『安全国』の学校は何の役に立つかもわからない技術を研究してる奴でいっぱいだね、これも研究テーマの一つとしてやってたはずだ。確か地磁気がどうとかって言ってたっけ…」

「確証があるわけじゃねえのかよ！本当に大丈夫なんだろうな…」

「なんだかんだで昔から使われてきた手法だ、後は俺達の幸運を信

じよう」

「テメエといると不運ばつかの気がするがな…」

ヘイヴィアは大きな溜め息を吐いた。

生前から散々巻き込まれていたが、その腐れ縁がまさか死後まで続くハメになるとは。

「これからどうするんだ？あのオブジェクトまだ空中庭園に向けて砲撃してるが」

「さつきから数えてるがもうすぐ5発撃ち終わる、そしたらこっちに気付かせればいい」

「主砲は弾切れになるだろうが、副砲が使われる可能性は？」

「さつきから竜牙兵に群がられても全て撥ね飛ばすことで対処している。副砲を撃てばわざわざ移動しなくてもいい位置でもだ。恐らくあの副砲は見た目だけだ」

「無視して弾薬の補充に行く可能性」

「さつきまでの会話からして黒のキャスターは俺を生け捕りにしようとしている。無防備に立っていたらチャンスだと思つて突っ込んでくる筈だ」

「勝算」

「充分にある」

・
・
・
・

5発の弾を発射し終えたオブジェクトが城塞に向けて転進するのを確認し、クウエンサーは指先大に丸めたハンドアックスに信管を突き刺した

そして、

「だーまやー！」

投げ上げて起爆した。

「なんの掛け声？」

『『島国』では花火の時にこう叫ぶんだってさ、フローレイティアさんが言ってた」

『『島国』の謎文化かよ…それよりも構えろ！ヤツがこっちに気付くぞ！』

1 km程離れているせいで少し小さく見えるオブジェクトが数瞬停止する。

旋回しこちらに正面を向け突撃の準備を整える。

そして、大量の車輪が地面に食い付き、

ゴツツツ!!と衝撃波を撒き散らしながら、突撃を開始した。

地面に轍を刻みながら突進してくるオブジェクトは、数秒もかからずにクウエンサー達を撥ね飛ばすだろう。

生身ならともかく、今の赤のアサシンはサーヴァントだ、激突の際の速度を調整すれば死にはしないだろう。

そう”黒のキャスター”は考え、

「やれ、クウエンサー」

「ああ」

起爆用無線器のボタンが押し込まれた。

・
・
・
・

くぐもった爆発音とともにオブジェクトの正面の地面が盛り上がる。

そして、大量の土が逆さに流れる滝のように巻き上げられ、地面にぽっかりと穴が口を開ける。

その質量分の土が無くなり、落とし穴が発生した地面に、4つの車輪のブロックの内1つが足をとられ、

そして、ドリフトするかのようには機体を派手に横滑りさせ、オブ

ジェクトが停止した。

内部に操縦者が存在した場合、凄まじい重量を持つオブジェクトが振り回されることで発生したGによって、体が水風船のように弾けていただろう。

その場合であればこの時点でクウエンサー達の勝ちだ。

しかし

「チッ！まだ動いてやがる！」

「てことは内部に操縦者がいないパターンだったか……」

オブジェクトは動きを止めず、地面に食い込んだブロックを抜き出すためにギヤリギヤリと地面を削りながら車輪を回していた。

このままではいずれオブジェクトは抜け出し、再び攻撃を開始する。

・
・
・
・

城というのは、王族や貴族などの居住空間であると同時に、敵の侵攻を防ぐための防衛施設でもある。

そのため、城内には籠城を前提とした施設が設けられるのが普通である。

たとえば敵の侵入を防ぐための堀と跳ね橋、たとえば食料を貯蔵するための倉庫、たとえば水を確保するための井戸。

井戸とは穴を掘って地下水を汲み上げる装置であり、地下では地上の川と同じように帯水層中を地下水脈が流れている。

城塞中に侵入した際に、井戸に十分な量の水が蓄えられている事は確認した。

つまりこの近辺には地下水が豊富に存在しており、その帯水層にまで爆発によって衝撃を届かせることができれば……？

ちなみに、

地下水の位置を探す場合、専用の機材が必要となるが、裏技として

ダウジングという技術がある。

科学的な根拠は薄いとされているが確かに昔から利用されてきた技術であり、極論であるが、針金が二本あれば地下水の位置を探り当てるのが可能であるとされている。

・
・
・
・

オブジェクトの足元の土が湿り気を帯び、色を濃くしていく。

爆発の衝撃で罅割れた地盤から地下水が上がり、周辺の地面に浸透していく。

さらにオブジェクト自身が嵌まった穴から抜け出す為に車輪を回すことで水分を含んだ地面がさらに攪拌され、柔らかい泥状に変化する。

異常に気付き、車輪を停止させた時にはもう手遅れだった。

穴に嵌まった車輪のブロックがズブズブと泥に沈み、オブジェクトの傾きが徐々に大きくなっていく。

傾きが限界に達し、ぶわりと反対側の車輪が浮き上がる。

そして、50mの巨体が、その側面を地面に叩きつけられた。

・
・
・
・

轟音とともにオブジェクトが地面に叩きつけられ、機体表面にイガグリのように生えていた副砲がへし折れて辺りに飛散する。

しかし。

「駄目だ。あの野郎、倒れる瞬間に主砲を振り回して地面に当たる箇所を調整しやがった!!」

本来であればクウエンサー達は、オブジェクトの主砲をオブジェクト自身の下敷きにすることにより破壊するつもりであった。

しかしオブジェクトは倒れる寸前、バットのようにな砲を振り回すことで機体の角度を無理矢理調整し、主砲とは反対側の面で地面と衝突し、主砲の損傷を回避していた。

仮にオブジェクトとはいえ、その装甲は鋼ではなく石できている。

つまり元となったオブジェクトよりも軽量であり、恐らく数十体のゴレムで引っ張り上げれば、再び戦闘を開始できるだろう。

だが。

「逆に都合が良いかもしれない、このまま主砲を鹵獲してしまおう」
クウエンサーがなんてことは無いように言う。

ハイヴィアは啞然とし、

「待て待て待て！話を飛ばすな！第一どうやってオブジェクトをバラすんだよ！さつき対戦車ミサイル撃ち込んだときは傷一つつかなかったじゃねえか！」

「大丈夫だ、もう終わってる」

と、対するクウエンサーは気楽なものだった。

「はあ？」

と、ハイヴィアが疑問の声をあげた瞬間。

ビキイ！と、オブジェクトに亀裂が入った。

「こいつの装甲は岩石を板状に加工して、そこに錬金術の術式を埋め込んでいる」

「ああ、さつき尋問したデブが言ってたな…。確か着弾の瞬間に硬化させることであらゆる攻撃に対処するだとかなんとか…」

敵からの攻撃を受けた瞬間にその部分の装甲板を魔術により硬化させて弾き、球体の曲面で受け流す。

そのようなコンセプトだったのだろう。

「でも、硬化するのは衝撃が加わった部分の装甲板だけだ。瞬間的な攻撃ならそれで十分受け流せるかもしれないけど、一点に圧力をかけ続けるようにすれば、周りの装甲板にもダメージは蓄積されてい

く。」

オブジェクトに入った亀裂がさらに増えていく。

「それに、岩は通常のオブジェクトに使われる鋼と違って靱性が低い、粘り強さが無いんだ」

「つまり、自分の重量で押し潰される」

グシャリ。

まるで卵を床に落としたように、オブジェクトが圧壊した。

・
・
・
・

「さて、それじゃあこいつと俺達を回収してもらわなきゃな」

「ああ、いい加減休みが欲しい。一丁女帝サマにお願いしてみるか」
そう言つて無線機を取り出し、空中庭園にいるキャストに繋ぐ。
暫く呼び出した後、応答があった。

「アサシンか、こうして通信してきたという事は死んではないようだな」

「「休みをください!!」」

「よほど毒漬けにされたいようだな…?」

「「すいません冗談ですうーツ!!」」

直接対面していなくても、身体は自然と正座の形を取っていた。

「というか今回の事は汝らの自業自得であろう」

「いやそうといえばそうだけど…。というか無線機の使い方覚えただな」

「ああ、あやつが使い方を紙に書いて置いていった。絶対に書いてある所以外を触るなど念押しされたが…」

「「(ありがとうコトミネ…)」」

二人は内心でコトミネに感謝した。

「で、どうやってそつちに戻ればいいんだ？」

誰が蝙蝠を殺したか 空中庭園迎撃戦 I

実際には、クウエンサーバーボタージュとヘイヴィアウィンチエルがサーヴァントとして召喚される確率は限り無く低い。

大前提として、彼らはこの時代よりも遙か未来に存在する可能性のある人物であり、またその未来、つまりは核の力が超大型兵器オブジェクトに根絶された未来が到来する可能性はゼロにほぼ等しいと言えるだろう。

いわば数多に枝分かれした平行世界のさらに先。そのような位置に存在する彼らを召喚するには、余程の縁があつたとしても小数点の後ろに無数の0が並び、気が遠くなるような後にようやく他の数字が現れるような確率を引き当てる事が必要である。

つまりは確率論上では可能性はゼロではないが、実際に召喚する事は不可能であると断言できる。

通常では召喚され得ない者が召喚される。それは、何らかのイレギュラーが発生したということに他ならない。

彼等が挑んだ決戦、超大型兵器「オブジェクト」が産み出された地『島国』での、過去、因果、因縁との雌雄を決する、文字通り世界を救う為の戦い。

それに彼らは間違いなく勝利した。

オブジェクトの台頭により、一度はステンドグラスのようにバラバラに砕けた国々。

それらは未だ傷を残しながらも再び一つの枠組みの下に集った。

オブジェクトはその在り方を変え、戦争の形は大きく変わった。

結局、戦争は無くならなかった。だが人は滅びず、彼らは確かに明日を生きていくだろう。

これが昔話や童話ならば、”めでたしめでたし”で締めくくられる

ハッピーエンドに違いない。

しかし、誰も気付かない、気付くことのできないイレギュラーが既に発生していた。

そもそも、四大勢力などもはや関係の無い、史上最悪の「大戦」。その地獄が起きてしまった引き金は何だったのだろうか。

『オブジェクト地球環境破壊論』

総重量20万トンを越えるオブジェクトの瞬発的な高速機動による大地の地盤への深刻なダメージ。

下位安定式プラズマやレーザービームを使った主砲砲撃による急激な温度差、気圧差による異常気象。

あの日、惑星の表面を覆っていた殻は砕け、「信心組織」の本国は溶岩に沈んだ。

星を覆う岩盤は既にひび割れ、様々な”自然な流れ”に影響を及ぼす。

そしてそれは、目には見えない、彼らにとって認識できない物の流れまで歪めていた。

霊脈

いわば大地を流れる魔力の流れ、魔術という概念が失われた時代において認識できない、されない無用の長物。

しかし魔術を行使するものが存在せずとも、霊脈は魔力を流し、蓄積させ続ける。

大地が割れた時、霊脈もまたぐちゃぐちゃに歪められた。

断ち切られ、ねじ曲げられ、不自然に繋げられた。

例えるならば、バグのようなものなのだろう。

いびつに歪められた霊脈は、まるで門のような挙動を取り、本来であれば存在し得ない場所への通り道を作り出してしまった。

そして、クウエンサーとヘイヴィア彼は、クウエンサーとヘイヴィア「クウエンサーとヘイヴィアらはこの戦争へと召喚されてしまった。」

・
・
・
・
・

視界にうつすらと光が入ってくる。

例えるならば十分な睡眠を取った後の朝のような、そんな気だるさを感じている。

「(あれ……?)」

そこで違和感を覚えた。意識が落ちる直前の事が思い出せない……?

「(何で俺は床で寝そべってるんだ……?)」

記憶の連続性が途切れている。

フラッシュバンの閃光を浴びて意識が飛んだような感覚に陥っていた。

「(そうだ…、確かオブジェクトと戦った後に紫の光が……)」

敵のオブジェクトを倒した後、巨大なビームのような光が迫ってきて、それから……?

「(確か、ヘイヴィアと一緒にオブジェクトの残骸の陰に飛び込んで……。ヘイヴィア?!)」

もし自分と同じ状況であればヘイヴィアも近くに転がっているはずだ。

そうならば限り無くまずい。

二人とも倒れた状態で仮に敵に見つかれば、サーヴァントですらないホームンクルスが相手だろうと成す術も無く首を落とされてしまうだろう。

その時、ぼやけた視界の端に人影が映った。

「(ハイヴィアか：?)」

その人影がゆっくりとこちらへ近づいてくる。

そして倒れたクウエンサーの顔を覗き込み、視界に白と赤の

「つっ!!」

咄嗟に顔を逸らした。

そして、顔面のあった場所に、ガチン!!と歯が噛み合わされた。

避けていなければ顔を食いちぎられていただろう。

初撃は回避したが、襲ってきた何かはクウエンサーに馬乗りになり、マウントを取った。

ようやく視界が明瞭になり、下手人の姿が捉えられる。

「ホムンクルス：？」

見た目は確かに何度も見た、黒の陣営が戦力として運用するホムンクルスに違いない。

だが、元々無表情であったが、それとは大きく異なり目が血走り、口からはボタボタと唾液を垂らしている。

例えるならば、ゾンビ映画で見るとような、ゾンビに噛まれ、感染した人のような。

それ以上に異常な点が、

「(振り落とせない：：：?!)」

クウエンサーの筋力値はEであり、これはサーヴァントとしては非力と言っても過言ではない。

しかしそれでもサーヴァントとサーヴァント以外の戦力には天と地程の差があり、ホムンクルスに力負けする事はないだろう。

だが、現にホムンクルスはクウエンサーの体を押さえつけている。

そして、再びクウエンサーに噛みつこうと顔を近づけ、バガツ!!と横からブーツを履いた足に蹴り飛ばされた。

「いつまで寝てやがる！テメエは朝のコーヒーが無いと頭がスッキリしないタイプなのかよ！」

「ハイヴィア！」

蹴り飛ばしたホムンクルスの脳天に弾丸を撃ち込みつつ、ハイヴィ

アが吠える。

「とにかく目が覚めたならとつとどこつち来て働きやがれ！」

ヘイヴィアに手を掴まれ、引つ張り上げられて立ち上がる。

先程までは気が付かなかつたが、オブジェクトと戦った屋外では無く、何か建造物の中に移動していた。

この内装は見覚えがある。キャスターの宝具である空中庭園、その内部だ。

そして、その廊下には、

先程クウエンサーを襲つたのと同じ表情をしたホームンクルス達が、雪崩のように迫っていた。

誰が蝙蝠を殺したか 空中庭園迎撃戦 II

話はオブジェクトを撃破した後に遡る。

「おーい、生きておるかー」

.....

「死んだか」

「生きとるわッ!!」

ガバツ！と瓦礫の中からヘイヴィアが立ち上がり叫ぶ。

謎の紫の光の洪水が直撃する寸前に、クウエンサーとヘイヴィアはオブジェクトの瓦礫の陰に飛び込んで難を逃れていた。

直撃していたら既に消し飛ばされ、この大戦から脱落していただろう。

「なんだ生きておったか」

「命からがら助かった奴に言う言葉じゃねえ！何だあのごんぶとビーム!?オブジェクトが半分溶けかかってんぞー!」

無線機に向かって吠える。

ヘイヴィアが盾にしたオブジェクトの装甲は、半分ほど熱したプラスチックのように溶けて捻じ曲がっていた。

「赤のバールサーカーの宝具であるな、受けたダメージを魔力に変換するといった効果だったか。それを限界まで溜めて放ったのであろう」

「そういうえば敵に捕らえられてやがったなああの灰色マツスル…」

そこでヘイヴィアが余計な事に気付いた。

「てか、何でこっちに撃ってきたんだ?」

クウエンサーとヘイヴィアがいる場所は黒の陣営の本拠地であるミレニア城塞からそこそこ離れており、背後には森が広がっているだけで特に何も存在しない。

「(オブジェクトの残骸ごと俺達を消し飛ばそうとした…?)」

そうならばかなりマズい。

クウエンサーとヘイヴィアが生きている事が分かれば直ぐに追撃が来るだろう。

そもそもこの大火力を放った赤のバーサーカーはどうしているのか。

「別に汝らが狙われた訳ではないぞ？」

「へ？」

「あれはルーラーに向けて放たれた物だ」

「ルーラーっていうとアレか、イレギュラーが起きた聖杯戦争に召喚されるっていう」

裁定者
ルーラー。

何かしらのイレギュラーの発生した聖杯戦争において、ルールに公平を期すため召喚されるマスターのいない管理者。

そして、

シロウ・コトミネの望みにとって最大の障害

「……」

「如何した？」

「いや、何でもない。それでルーラーがどうしたんだ？」

「彼奴めに放たれた一撃を、宝具を展開して受け止めたのだ。そして受け流された分が向きを変えて汝らを襲ったのだな」

「つまり？」

「流れ弾だな。汝らは完全に巻き添えを食らった訳だ」

「チクショウとばつちりじゃねえか!!」

ヤケになって叫ぶ。

聖杯戦争において「死因・流れ弾」など笑い話にもならない。

「赤のバーサーカーも既に消滅している。大聖杯の吸引も始めておるぞ…。そういうえば貴様の片割れは何処へ行ったのだ？」

そう言われてヘイヴィアも気がついた。

そういうえばクウエンサーの姿をさつきから見えていない。

「まさかアイツ死んでるんじゃないだろうな…」

そう言っただけを見渡す。存外、すぐに見つかった。

盾にしたのであろうオブジェクトの残骸と一緒に、少し離れた地点

で転がっていた。

消滅していないということは生きてはいるのだろう。だが、
「嘘だろコイツ気絶してやがる…」

首をガクガクと揺さぶっても、ビンタしても一向に目を覚まさない。
い。

外傷も特に見当たらないということは、頭に強い衝撃が加わった事
による脳震盪だろう。

「見つかったならばよい。黒のサーヴァントも空中庭園に向かってき
ている故、早く登ってきて防衛に回れ。」

「はいはい…、コイツは俺が担いで行くしかないのか…。」

気絶したままのクウエンサーを肩に担ぎ上げ、ミレニア城塞へと目
を向ける。

「にしても、正気を疑う光景だな…」

黒の陣営の本拠地であるミレニア城塞、その大部分は赤のバーサー
カーの一撃、ルーラーの防衛により逸れてしまったそれが直撃してい
たことで瓦礫の山になっている。

そして、その頭上に鎮座する空中庭園により、ゆつくりと巨大な球
体が吸い上げられようとしていた。

赤のキャスターの宝具である、「ハシキングガーデンス・オブ・パピロン虚栄の空中庭園」

この宝具は『逆しまである』という概念を用いて浮遊する空中要塞
である。

内部では水は下から上へ流れ、植物は上から下へと育っていく。

その『逆しまである』という概念を用いて、ミレニア城塞の地下か
らこの聖杯大戦の核である大聖杯を吸い上げる。文字通り引っこ抜
いて奪い取る事こそが、今回の戦闘における最優先目標であった。

そして、その目的は半ば達成されつつあった。

既に大聖杯は半ば持ち上がりつつあり、完全に空中庭園に格納され
るまでそう長い時間はかからないだろう。

というか、

「瓦礫までビュンビュン吸い上げられているんだが、俺に今からあそ
こに飛び込めと？」

「ああ、いかに貧弱とはいえ一応はサーヴァントなのだ、当たっても死ぬことはなからう?」

「死ななくても痛てえんだよ!!」

そんなヘイヴィアの叫びを聞き届けぬまま、ブツリと無線が切られた。

「……………」

「…あの女いつか絶対にシバいてやるツ…………!!」

・
・
・
・
・

「それで妙に体が痛いのか、もっと丁寧に運べなかったの?」

「もっぺん気絶させて欲しいならそう言えよ、銃床で額かち割ってやるからさあツ!!」

ドカドカドカッ!!!とヘイヴィアが人波に向かってライフルを連射する。

頭に命中したホムンクルスは倒れるが、それを踏み潰して次の一団が迫ってくる。

「どうか何なのあれ?いきなり世界観がゲーセンのゾンビ撃つやつになってるけど」

「さつき聖杯を奪い返しに黒のサーヴァント達が来たことは言っただろ?そんで黒のランサーとそのマスターが合体した」

「合体???」

「そいつが近くにいたホムンクルスを噛んで、あのゾンビを増やしてた訳だ」

「噛んで…?そういうえば黒のランサーの真名はヴラド三世だったわけ」

ヴラド三世、ヴラド・ツェペシュといえば、15世紀における

ワラキアルーマニアの君主であり、ドラキュラ吸血鬼伝説の元となった人物でもある。そしてドラキュラ伝説として有名なのが、人を噛んで吸血し、噛まれた方は眷属にされるといふもの。

「それは分かった。いや合体のくだりはよく分からないけど…」
そう言いながら手に持った爆弾をある程度密集した所に投げ入れ、爆破していく。

半ば吸血鬼になっていることで筋力は上がっているが、ロクに頭が働いていないのか動きは鈍重になり、かつ体の耐久度は上がっていないことは救いであつた。

バラバラに爆破するなり頭を撃ち抜くなりすればキチンと死んでくれる。

「なかなか数が多いな…。そういえばその黒のランサーの方はどうなってるんだ？」

「ああ、やつは暴走してんのか敵味方関係なく襲いかかってな、まあこっちのランサーとライダーとアーチャー、向こうのアーチャーとキヤスターにルーラーもいたし大丈夫だろ、多分…」

「そうか…。あれ？ハイヴィアはそれを見てたんだろ、なんで一緒に戦ってないんだ？」

「あんな超人共の天下一武闘会に割り込めるかよ、足手まといになりそうだし気配遮断使って逃げてきたんだよ」

「なんか情けなくない？」
「気絶してたヤツが言うなよ」

そのまま一定の距離を保って撃ち続けていると、徐々に数は減り、いつしか立っているホムンクルスは0になり、廊下はホムンクルスの死体で埋め尽くされていた。

「終わったー！死屍累々だなあ…」
「…なあハイヴィア、これ誰が片付けるんだろうな…」
「…言うなよクウエンサー、薄々分かってはいるけどよ…」

後程訪れるであろう作業を思い浮かべ、苦い表情をするクウエンサーとハイヴィア。

そこへコトミネからの通信が入った。

「アサシン、可能な限り早急に礼拝堂に来てください。」

「イエッサー、アサシン了解」

それだけの短い通信で念話が切られる。

「念話だって分かってるけど、つい無線機口元に持つてっちやうよね。」

「生前からのが癖になってるんだろ。」

・
・
・
・
・

そうして向かった礼拝堂には、クウエンサーとヘイヴィア以外の空中庭園に乗り込んできたサーヴァントが勢揃いしていた。

だが、

「(なんか様子がおかしくねえか…?)」

「(ああ、もつとバチバチしてるものだと思ってたけど…)」

敵意は確かにある。だがその場の空気を構成しているのは困惑であつた。

そして何より、シロウ・コトミネが同じ陣営であるはずのライダーとアーチャーから敵意を向けられている。

つまりは

「マスター、もうネタばらししちゃったのか」

「自ら明かした、というよりはルーラーの真名看破によつてですかね。元々ここでも明かすつもりではありましたが」

「そうかよ、そりゃ敵意つか殺意も向けられるわけだ」

そして、クウエンサーとヘイヴィアはシロウ・コトミネの

「そこに立つて事は、テメエもマスターを裏切つてやがったのか…」

「ああ、悪いなライダー、アーチャー」

否、天草四郎時貞の隣に立った。

「俺達もこっち側だ」

そして、聖杯大戦は歪んでいく。

決定的に、取り返しのつかない方へと。